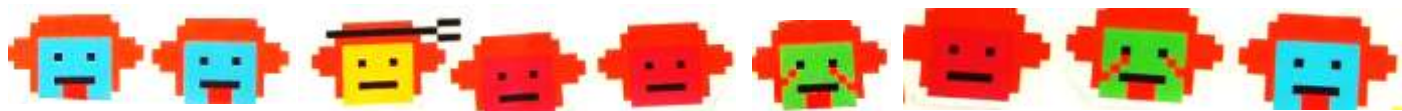


北海道特別支援学校

スポーツ研究成果報告書 2017 (No.1)



スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重し
これと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な
思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである。

～「スポーツ基本法」より～

巻 頭 言



特別支援学校の児童生徒に対するスポーツについて、「スポーツ基本法」は「スポーツは、とりわけ心身の成長の過程にある青少年のスポーツが、体力を向上させ、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培う等人格の形成に大きな影響を及ぼすものであり、国民の生涯にわたる健全な心と身体を培い、豊かな人間性を育む基礎となるものであるとの認識の下に、学校、スポーツ団体、家庭及び地域における活動の相互の連携を図りながら推進されなければならない。」と述べています。

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会は、先のスポーツ基本法の基本理念を踏まえ、北海道の特別支援学校児童生徒のスポーツ振興に関する事業を行い、障がいのある児童生徒の心身の健全な発達に寄与することを目的として、平成 28 年 7 月、設立された法人です。

当法人は、本道特別支援学校フットサル大会を主催する事業、特別支援学校に F リーグ所属エスプラダ北海道の OB 選手を派遣する事業、フットサル用具を寄贈する事業等とともに、平成 29 年度、北海道稚内養護学校及び北海道紋別高等養護学校、北海道中札内高等養護学校の 3 校に児童生徒のスポーツ活動充実に向けた実践研究促進の助成事業を行いました。

本集録は、この助成対象 3 校の実践研究成果報告を柱として、当法人が主催した「特別支援学校フットサル指導者派遣」や「2017 第 1 回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会」の結果等も併せたものです。

本法人は、法人の目的を達成するため、北海道特別支援学校児童生徒のスポーツ活動に係る「知の共有化」を目指して、道内各特別支援学校の体育科での授業、また課外で行われる各スポーツ活動の指導、スポーツ活動を通じた地域の人々との交流活動、何よりも児童生徒の障がい等の実態に応じて創意工夫した実践研究等を、助成対象として広く募集して、その成果を本紀要に掲載し、より一層の障がい児スポーツの振興・充実を図ってまいります。

北海道の各特別支援学校教職員をはじめ保護者、支援者等、幅広い皆様方からの忌憚のないご意見ご指導などお願いする次第です。

平成 30 年 3 月

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会
理事長 小野寺 眞 悟

目 次

巻 頭 言

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会理事長 小野寺 眞 悟

論 考

特別支援学校のスポーツ活動充実に係る一考察

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会事務局長 鈴 木 重 男
北海道立特別支援教育センター教育課長 北 嶋 公 博

実践研究 1

知的障がい特別支援学校でのフットサル指導の実践と可能性
～稚内養護学校中学部、高等部の実践を通して～

実践研究 2

平成 29 年度北海道紋別高等養護学校フットサル指導実践に係る研究
～外部指導者の活用や指導方法の工夫～

北海道紋別高等養護学校教諭 三 木 進

実践研究 3

高等養護学校のフットサル指導における実践と工夫

北海道中札内高等養護学校教諭 濱 谷 良 介

報 告 1

平成 29 年度フットサル指導員派遣巡回指導報告

社会福祉法人明日佳職員 吉 田 順 省

報 告 2

2017 第 1 回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会試合報告

大会主管:一般社団法人エスポラーダ北海道スポーツクラブ GM & 監督 小野寺 隆 彦

特別支援学校のスポーツ活動充実に係る一考察

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会
事務局長 鈴木 重 男
北海道立特別支援教育センター
教育課長 北 嶋 公 博

I はじめに

特別支援学校は、障がい児の自己実現が可能となるよう、個々に応じた適切な教育課程の編成・実施を前提として設置されている学校である。

したがって、特別支援学校で指導されるスポーツ活動も、特別支援学校学習指導要領に基づくとともに、スポーツ基本法第2条第5項「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」などを踏まえて、各学校で児童生徒の個々の状況等に応じて、創意工夫し、活発に指導展開するよう努めることが大事である。

本稿は、本道特別支援学校スポーツ活動の充実に寄与するため、このような特別支援学校のスポーツ活動の基本的な考え方等を整理するとともに、筆者の特別支援学校でのスポーツ指導の実践等を整理・考察するものである。

II 特別支援学校の児童生徒が参加するスポーツの整理(試案)

現在、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、スポーツ基本法の理念等を具現するため、障がいのある児童生徒のスポーツ活動の在り方などに関心が向けられていることは好ましいことである。

スポーツは、他の競技者と競い合うことで感受される、勝つ喜び、負ける悔しさ、向上するための努力など、人間関係を広げ、深める社会性の育成への寄与や、児童生徒個々の自己叱咤による努力することで心身の強靱さの育成にも寄与する大切な教育活動である。

したがって、特別支援学校の児童生徒が参加することができるスポーツを数多く開発・工夫等することが、特別支援学校関係者には求められている。

ところで、特別支援学校の児童生徒が参加できるスポーツは、体育科等の授業で行うスポーツ、校内で開催されるスポーツを含めて、地域で開催されるスポーツや、より広範な市町村レベルや都道府県レベル、また国レベルのスポーツまで、多くのレベルのスポーツがある。

これら特別支援学校の児童生徒が参加することができるスポーツ・ゲームに参加する場合の「個別の配慮」と「障がいの種類・程度」のルール配慮により区分すると、次のようになる。

表1 障がい児のスポーツの区分(試案)

区分		障がい種別・程度等の規制	
		ある	ない
個別の配慮	ある	創意工夫型スポーツ ・車いすスティックホッケー ・ゴロ野球 ・特別支援学校と小・中学校の交流(フロアバレーボール等)	特別支援学校型スポーツ ・小野寺眞悟杯フットサル大会 ・北海道ハンディキャップスキー大会
	ない	パラリンピック型スポーツ ・パラリンピック ・デフリンピック ・スペシャル・オリンピックス	インクルーシブ型スポーツ ・少年団 ・中体連 ・高体連

1 創意工夫型スポーツ

特別支援学校学習指導要領は、障がいの状態や特性及び心身の発達の段階等、並びに学習の進度等を考慮して、基礎的・基本的な事項に重点を置き、個別の指導計画を作成して指導に当たることとされている。したがって、特別支援学校の教師は、児童生徒個々の障がいの状況等を、充分、把握・理解した上で、個々の児童生徒が持っている力を十分に発揮することができるよう、創意工夫することが求められる。

例えば、時間を競う100m走やスキーの滑降等は、時間を競うスポーツであるが、自己申告制による時間差の多少で勝敗を決定する場合や、バスケットボールで個々の状況でバックボードに当てた場合でも加点するなど、弾力的な

ルールで同一スポーツを行うことができる。

また、筋ジストロフィーの児童生徒が在籍している病弱特別支援学校では、電動車いすで移動し、長いスティックを用いたホッケー型のスティックスポーツを独自に創意工夫している。このような道具・用具の創意工夫による新たなスポーツもこのカテゴリーに入れる。

2 特別支援学校型スポーツ

特別支援学校は、学校教育法において、障がい種別の枠を超えた学校として制度化され、設置者の特段の規定がない限り、多様な障がい種の児童生徒が在籍することになる。筆者が勤務する法人が主催する「小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会」は、通常のフットサルルールを適用しつつも、特別支援学校に在籍していることをルールとして開催している。つまり、男女の性別も含め、視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由等の生徒がこの大会の参加対象となっている。しかし、視覚に障がいのある生徒の場合などは、視覚保護の立場からゴーグルの使用を認めるなど、障害に応じた個々への配慮はできる限り行っている。

3 パラリンピック型スポーツ

パラリンピック（「視覚障がい」「肢体不自由」「一部、知的障がい」対象）、デフリンピック（「聴覚障がい」対象）、スペシャルオリンピック（「知的障がい」対象）は、同じ障がい種別、同じ障がいの程度で区分した競技者同士が競い合う。例えばパラリンピック「リオ 2016」大会では、100m 走で、同一障がい種でも障がいの程度等別に男子 16 クラス、女子 14 クラスの決勝レースが行われ、全部で 30 人の金メダリストが誕生している¹⁾。

また、北海道においても、視覚障がい特別支援学校間、聴覚障がい特別支援学校間の児童生徒同士のスポーツが毎年開催されている。

4 インクルーシブ型スポーツ

通常、障がいの程度が軽い児童生徒は、多くの場合、中体連や高体連等のスポーツに出場し

ている。また例えば、「全日本小学生中学生アーチェリー選手権大会」は、特段、車いす使用児の参加もルールで認めている。

このように、特別支援学校に在籍する視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由、病弱の児童生徒が、地域の中で、地域の人々と共に同じスポーツに参加することができるのが、このインクルーシブ型スポーツの特長になる。

III 視覚障がい特別支援学校での指導実践例

筆者は、長年、北海道の視覚障がい特別支援学校に勤務し、視覚障がいのある児童生徒の教育に当たってきた。筆者には忘れることのできない貴重な体験がある。1970 年に北海道札幌盲学校に奉職した、翌年、1971 年、大阪市の日本ライトハウスで開催された視覚障がい児の手指動作等アセスメント研修会に参加する機会を得た。当該研修会は、約 1 ケ月間、派遣された。その日本ライトハウスに全く視覚を活用することができない日比野清氏（後日、同所視覚障害リハビリテーションセンター所長等歴任）が職業訓練を受けていた。同所では、職業訓練の一環として全盲者に普通卓球を指導していた。日比野氏は、筆者に普通卓球をしないかと言い、私には、ラバーの貼っていない卓球ラケットを使用するよう指示した。ここで、日比野氏が勝ち、私は普通卓球で視覚を活用できない日比野氏に負け、そのお陰で、筆者は視覚障がい児へのスポーツ指導には、そのとき、その場の状況を想起できるように、視覚情報を聴覚情報に置き換える工夫などあれば、スポーツが可能となることを体得できた。

1 「閉じた技能」と「開いた技能」

視覚障がい児にだけではなく、どのようなスポーツであっても基礎・基本的動作は、「閉じた技能」のつながりと、変化に応じて自分の体等を状況の変化に適合させる「開いた技能」が一体化した技能と言える。図示すると次のようになる。したがって、視覚障がい児には、スポーツの固有の技能を何度も何度も練習して、習

熟して、少ない情報でも自動的に体が対応するまでに高めるとともに、視覚情報を聴覚・触覚情報に的確に変えることができれば、視覚から得る情報が少なくても、多くのスポーツは可能になる。世界盲人百科事典²⁾は、「閉じた技能」と「開いた技能」(一部改変)を、次のように記している。

表2 「閉じた技能」と「開いた技能」の特性

閉じた技能 ○運動感覚的フィードバック、固定された環境内での身体及び諸感覚器官の使用を含むが、行動に必要とされたものの予測が極めて持ちやすいのが特徴 ○単調なものの反復によって、基本的技能又は習慣的技能を習得させていく ○環境からは独立している ○身体像の形成、自己を中心とした空間の評価、空間軸の形成、身体移動のための基本的習慣形成が主なテーマ 開いた技能 ○予測不可能な流動的な環境の要請で、予測が立とうが立つまいが、何らかの反応を強制されてくる刺激の中で遂行されなければならない場合に、知覚的技能が最大限に活用される ○身体各部の調整力 ○体重・パワー・重心の位置と運動感覚の協応 ○主体と外的事物との時間的・空間的(距離的・高度的・方向的)関係の把握 ○複雑な一連の運動又は、次々と連続して起こる運動の整合 ○失明以前に行っていたような行動形式、ルールなどがそのまま適応される、すなわち視覚なしで失明以前に行っていたことを再び行うことが主なテーマ

2 サッカーとレスリングの部活動指導

筆者は、北海道高等盲学校(現北海道札幌視覚支援学校)勤務時、1981年、北海道高等学校体育連盟にサッカー部の加盟を申請した。しかし、視覚障がい学校を受け入れた前例がなく、ケガなどの懸念があるとし、1年間、検討期間として、札幌南高等学校等との練習試合を通して、判断されることになった。1年後、サッカー専門部の理解を得て、1982年、北海道高等学校体育連盟に加盟することができた。



新聞記事1 1982年 高体連加盟の報道

この当時の高等盲学校の生徒は、生徒個々の

視力状況にもよるが、50m先のボールだけではなく、10m先のボールを目で認知することが難しい生徒もいた。高体連札幌地区予選等の試合は、20点差以上の得点差で全ての試合で負け、かつ1点も取ることができなかった。筆者は、生徒の「残念さ」を肌で感じ、高等盲学校の生徒が他の高等学校の生徒と互角に戦うことができるスポーツを探した。丁度そのようなとき、全米アマチュアレスリング大会で視覚障害学生がチャンピオンになったとの記事が、当時の視覚障害専門誌に掲載されていたので、北海道でも可能ではと考え、早速、北海高等学校早坂先生に指導を仰いだ。高等盲学校では午前6時半から体力トレーニングを行うなど、自校での体力をつけるための徹底的な指導と共に、放課後、北海高校に行って、同校レスリング部と合同練習をするなどを工夫した。このこともあり、翌1983年度から、北海道高等学校体育連盟アマチュアレスリング専門部加盟校として、高体連レスリング大会に出場することができた。その結果、1983年度は幾人かが札幌地区予選を突破するだけであつたが、1984年からは札幌地区予選の団体戦でも予選突破し、北海道大会に進めるまでとなった。



新聞記事2 1983年の高体連ベスト8の報道



新聞記事3 1984年国体道予選の報道

弱視を「フォール」。



田中 良広[※] (25)
—レスリング・成年男子フリースタイル57kg級—

写真記事 4 1984 年、国体道予選優
回わかくさ国体出場、現帝京平成大学
校中学部卒業、1984 年当時は高等盲^{ろう}学^{がく}

田中良広氏は、1983 年度の北海道教員採用検査では視力による欠格条項があり、その適用により受検はできなかった。写真記事 4 は、1983 年度、国体道予選で優勝し、当該条項をはねのけ、特別受検して 1984 年度採用された田中さんの当年度開催の国民体育大会第 39 回わかくさ国体出場を伝える記事である。

筆者は、視覚障がい特別支援学校の指導実践ではあるが、それを振り返ると、特別支援学校の児童生徒には、一見、容易にできないと思われるスポーツであっても、「閉じた技能」の基礎的・基本的技能を飽くなき回数で、繰り返して習熟度を高めることや、障がいのない生徒に勝利するとの強い精神力を高めることにより、障がいがあっても、同じ年齢の生徒と同じマット上で戦うことができるまで、その生徒の競技力を高めることができるという実践体験である。

このような筆者の体験を踏まえると、特別支援学校が所在する地域で実施される多様なスポーツに生徒が参加することができるよう、特別支援学校は意図的・計画的に指導して、生徒のスポーツの機会をより広げるとともに、生徒の障がいの理解・認識を深めることにも意を尽くすべきではと考えている。

なお、特別支援学校の児童生徒がインクルーシブ型スポーツとして、地域の通常のスポーツの大会等に出場することは、障がい児の理解・認識の推進にもつながる。

IV まとめ

本稿では、特別支援学校の児童生徒が参加することができるスポーツを当該スポーツのルール規制等を基にして、「創意工夫型スポーツ」「特別支援学校型スポーツ」「創意工夫型スポーツ」「パラリンピック型スポーツ」「インクルーシブ型スポーツ」の 4 カテゴリーに整理(試案)することができた。

また、地域の中で実施される中体連や高体連など、特別支援学校の生徒と同じ年齢の生徒が行うスポーツである「インクルーシブ型スポーツ」について、筆者が行った視覚障がい生徒への「サッカー」と「レスリング」の指導実践を振り返ることができた。

特別支援学校は、児童生徒の個々の障がいの状況や個々のスポーツ・ニーズを的確に把握して、児童生徒が、将来、地域の中で円滑に、かつ健康に生活することができよう、積極的に指導しなければならない。現在、「働き方改革」での教職員の部活動指導や地域の人々に当該部活動等を担ってもら部活動指導員の導入などの施策が検討されていることを踏まえながら、特別支援学校は児童生徒のスポーツ活動のより一層の充実に向けた取組をすることが求められる。

筆者の法人は、北海道の特別支援学校のスポーツ活動の振興・充実に寄与するため設立された法人である。次のスポーツ基本法前文を胸に納めて、責務を全うするよう努める所存である。

スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである。また、スポーツは、人と人との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである。さらに、スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠である。

引用・参考文献

- 1) 東京オリンピック 2020 ホームページより引用
<https://tokyo2020.jp/jp/games/sport/paralympic/athletics/>
- 2) 1972 日本ライトハウス「世界盲人百科事典」昭和 47 年発行版

知的障がい特別支援学校でのフットサル指導の実践と可能性

～稚内養護学校中学部、高等部の実践を通して～

北海道稚内養護学校

I はじめに

本校は、昭和 52 年に、知的障がい特別支援学校として開校し、42 年目を迎える学校である。平成 10 年には、小学部、中学部に加えて高等部を開設し、義務併置の特別支援学校となった。宗谷管内唯一の特別支援学校であるため、近年、近隣地域から中学部や高等部へ進学する生徒が増加傾向にある。

平成 29 年度は、小学部 11 名、中学部 8 名、高等部 13 名で全校児童生徒 32 名、中学校特別支援学級から本校へ進学した生徒は、11 名、中には中学校で部活に参加していた生徒もいる。

II 研究の背景と目的

1 背景

平成 19 年に特別支援教育がスタートして、10 年を経過、地域で生活することの意義が少しずつ浸透し、大きくはインクルーシブな社会への転換が図られている。宗谷管内においても、将来にわたって地域で生活したい、親元から通学したい、そんな生徒自身の気持ちも関係するのか、本校の高等部の生徒の状況は本校中学部で学んだ生徒に加えて中学校特別支援学級から進学する生徒が増えている。障がいの程度にかかわらず、成長期にある子どもたちが意欲的、主体的に取り組めるスポーツの指導は、どの特別支援学校にも求められることであり、授業実践を通してどのような指導内容、方法が適切なのかを課題とした取組が急務である。

本校の生徒の状況に応じたスポーツの授業実践として、「フットサル」の可能性を探究してみたい、そんな思いから本研究への取組が始まった。

2 目的

本校生徒の障がいの状況は多様であり、医療

的ケアが必要な児童生徒や重複障がいのある児童生徒も多い。様々な障がいのある児童生徒にどのような指導内容、方法が適切なのかを考え、教材・教具の工夫や開発を含めた、実践の取組から本校の生徒に最適な指導法を見いだすことを本研究の目的としている。合わせて、知的障がい特別支援学校（義務併置校）の教職員の「フットサル」への意識の変容を調査研究により探求し、義務併置の知的障がい特別支援学校における「フットサル」指導の可能性を探りたいと考える。

III 研究の内容と方法

<実践研究>

1 内容

(1) 対象

- ア 稚内養護学校中学部 「保健体育」
生徒 7 名
指導者 5 名（保健体育免許保有者 2 名）
- イ 稚内養護学校高等部 「保健体育」
生徒 12 名
指導者 7 名（保健体育免許保有者 4 名）
- ウ 中学部、高等部「交流及び共同学習」
（稚内大谷高等学校生徒との交流）
本校中学部、高等部生徒 21 名
稚内大谷高等学校生徒
（サッカー部 19 名）
本校教諭
エスポラーダ OB 吉田 順省 選手
笠間 慎也 選手
市場 大資 選手

(2) 内容

- ア 中学部「保健体育～球技～」
題材名：フットサル

○指導計画

- I 平成 29 年 8 月 21 日～9 月 6 日（計 6 時間）
・対面でパス（※ボールに慣れる）

- ・インサイドトラップ→1インサイドキック
2トーキック、ドリブル
- ・PK～ゴールめがけて強く蹴る

※インサイドキック→トーキック活用

II 平成29年11月13日～12月4日(計6時間)

- ・グリット内でドリブル
- ・フットサルゲートボール
- ※旗門①～⑥を通過し、ゴールへシュート
- ・ミニゲーム～3対3、3対3、3対2等ランダムにチーム編制しゴールを決めた時は仲間で喜びを分かち合う。(※繰り返す)

III 平成29年12月11日～20日(計4時間)

- ・壁パス&シュート
- ※指導者へのパス→移動→パスを受ける→前進してシュート
- ・対戦形式ゲーム
- ※1対2、2対3、3対3、5対5等の編制
 - 仲間と協力する。
 - 試合には勝敗があることを学ぶ。
 - 喜びや悔しさを仲間と分かち合う。
 - 協力して用具の片付け等を行う。
 - 挨拶する。

イ 高等部「保健体育～球技～」

題材名「フットサル」

○指導計画

I 平成29年11月2日～14日(計4時間)

- ・ボールタッチ
- ・ボールストップ→パス
- ・サークルパス
- ・シュート練習
- ・ドリブルシュート

II 平成29年11月16日～12月5日(計5回)

- ・対人パス
- ・パス&ゴール→シュート
- ・フットサルゲートボール
- ※二人一組で①～⑤のゲートを順にボールをパスしながら通す。最後にゴールに向かってシュートする。

III 平成29年12月7日～19日(計4回)

- ・パス→ドリブル

- ・2対2、2対1で1分間～3分間の試合
- ※発展：(フットサルと動きが似ている) ユニホックの指導

ウ「交流及び共同学習～稚内大谷高等学校交流」
～外部専門家によるフットサルの実践～

＜平成29年12月6日 13:30～15:00＞

- ・開会式
- ①ボールタッチ
- ②対人パス
- ③パス&ゴール→シュート
- ④ゲートボール競争(タイム戦)
キックザターゲット
- ⑤選抜試合
- ※養護学校生徒+講師 対 大谷高校生徒
- ※講師3名 対 養護学校生徒6名
- ⑥ガチンコ対決(デモンストレーション) 試合
～生徒は交流観戦
- ・閉会式

(3) 方法

中学部、高等部の「保健体育」授業において、中学部が全16時間、高等部は全13時間のフットサルの指導を実施した。指導計画、指導案作成、教材教具の工夫等を実践し、フットサル指導の指導法を考察、生徒の変容からフットサルが及ぼす指導の効果と可能性を検証した。

ア 指導計画は前述の(1)内容に記載

イ 指導案は、中学部「保健体育」学習指導略案Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ及び高等部「保健体育」学習指導略案Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを資料より参照。

「交流及び共同学習」については、「稚内大谷高等学校交流」学習指導略案を資料より参照。

ウ 生徒の変容

- ・資料～授業の様子<写真>を参照。
- ・中学部生徒7名、高等部生徒12名にアンケート(※資料参照)を実施し、結果を集計した。

＜調査研究＞

1 内容

(1) 対象

- ・稚内養護学校教職員
- 小学部 9名、中学部 8名、高等部 8名

寄宿舍 15 名

(2) 内 容

- ・アンケートによる指導者の意識調査

〈質問項目〉

- ①授業による運動（生涯スポーツ）の指導の必要性
- ②稚内養護学校の児童生徒に運動（生涯スポーツ）を指導する場合の課題
- ③特別支援学校で実施する運動（生涯スポーツ）の指導の可能性
 - ・経験、課題、意欲
 - ・具体的な運動（生涯スポーツ）の内容
 - ・意見、要望等自由記述

2 方 法

(1) 方 法

フットサルに関するアンケートを全教職員に実施し、実際に授業実践を通して生徒の変容に触れた中学部、高等部の教職員と今回児童への指導を行うことのできなかった小学部、寄宿舍の教職員のグループに分けて比較検討を行った。

(2) 実施期間

平成 29 年 12 月 18 日～22 日

※授業実践終了後に実施した。

IV 結果と考察

1 結 果

〈実践研究〉

(1) 指導計画の有効性

中学部、高等部の「保健体育」の授業に単元「球技」として「フットサル」の指導内容を位置付けた。また、毎年高等部で行っている稚内大谷高校との「交流及び共同学習」にエスプラダ OB を招いてのスポーツ交流を計画し、中学部と高等部合同で交流を計画することとした。

計画段階から、12 月の交流実施に向けた指導内容を計画し、中学部と高等部の指導者間での打ち合わせも数回行っている。中学部、高等部の指導者がお互いの授業に出向いて指導に協力するなどの教師間の交流も行われた。

(2) 用具等の整備と教材・教具の工夫

これまでの授業でもサッカー等の指導は行っていたが、フットサルの授業に本格的に取り組んだのは、今回が初めてである。中学部、高等部には車いすを使用する生徒がそれぞれ 1 名、また、知的障がいの重度の生徒が多い中、全員がフットサルのボールでパスやシュート練習を行うことができた。他の球技のボールに比べ、障がいの重い生徒には扱いやすい大きさ、硬さ、カラフルさであると感じた。比較的狭い本校の体育館でも練習や簡単なゲームの対応が可能である。

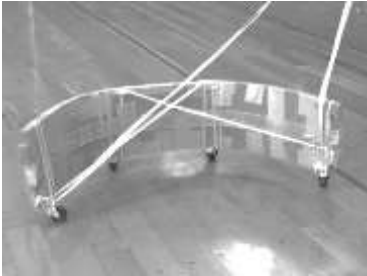


生徒の指導に有効だった具体的な「教材・教具の工夫」例として次の 2 つをあげる。①視覚に障がい（遠くのものが見えづらい）

のある生徒には、床の色と区別が付きやすい色のボールが扱いやすい。



②車いすを使用し、自走可能な生徒に「ボールキャッチマシーン」と名付けた教具を作製した。一人でボールを取りにいたり、パスしたり、ゴールにシュートすることが可能になった。



(3) 生徒の反応（※アンケートから）

質問1「フットサルを知っていますか」

質問2「フットサルをやったことがありますか」

2問とも生徒全員が「知っている」「やったことがある」と回答した。

質問3「フットサルの練習は楽しかったですか」

○すごく楽しかった(3名) ○楽しかった(14名)

○まあまあ楽しかった(1名)

○楽しくなかった(1名)

質問4「フットサルは好きですか」

○大好き(6名) ○好き(7名)

○まあまあ好き(3名) ○きらい(1名)

質問5「エスポラダ選手との練習は」

○すごく楽しかった(7名) ○楽しかった(9名)

○まあまあ楽しかった(3名)

質問6「練習で難しかったこと」

①ボールを蹴る(7) ②シュートする(7)

③パスする(6) ④パスを受け取る(3)

⑤ゴールする(4) ⑥試合する(6)

⑦友達と一緒に練習する(4)

質問7「練習で楽しかったこと」

①ボールを蹴る(5) ②シュートする(11)

③パスする(4) ④パスを受け取る(2)

⑤ゴールする(9) ⑥試合する(7)

⑦友達と一緒に練習する(6)

中学部、高等部生徒全員が授業でフットサルを体験し、一人一人が充実感を持ったこと、授業を重ねるごとに「できた」「分かった」が伝わる状況が

生まれ意欲や「やってみたい」という気持ちに繋がっていったと考える。

授業回数を重ねるごとに生徒の表情が自信に溢れ、「やった」「できた」という達成感を味わえていると教師が感じられることが多くなっていった。

「フットサル」を楽しいと感じ「好き」と答える生徒がほぼ全員であったことに、今後の大きな可能性を感じることができる。質問7の結果にみられるように、シュートやゴールしたり、友達と一緒に試合する中で生まれた充実感を生徒たちが確かに実感できたと考えている。

<調査研究>※別紙資料1 アンケート結果から

(1) 教職員の意識について

今回の実践研究の中で、授業者として指導に関わった教職員、これまでに運動(スポーツ)の指導経験がある教職員は、特別支援学校の授業で児童生徒が生涯にわたって楽しめる運動(スポーツ)の指導が必要と考えている。また、特別支援学校で児童生徒の将来の余暇に繋がる運動(スポーツ)指導への意欲では、経験のある、なしに関わらず、やってみたい、ぜひやってみたいと考えている回答が多数であった。

フットサルの授業を実践した学部と実践がない学部との違いではなく、教職員にとって、指導の経験があることが、特別支援学校でのフットサルの指導の可能性を考えることや教職員自身の指導の意欲にも繋がっている。

(2) フットサル指導の課題と可能性

特別支援学校で運動(スポーツ)を指導する場合の課題として、児童生徒の実態に合ったスポーツがない、継続した指導や将来にわたって続けられる場所がない、専門的な研修の場がない、などの意見があげられている。

本研究では、特別支援学校の授業の取組としてのフットサルの指導について一考(指導案等)を提案することができた。また、児童生徒がフットサルの体験を通して、運動(スポーツ)することの楽しさや技術の習得に繋がる練習方法などを学ぶことができたと考えている。

2 考 察

(1) まとめ

これまでは運動（スポーツ）の視点で小学部「体育」、中学部・高等部「保健体育」の授業を考えることは少なかったが、アンケートでは教職員が指導してみたいスポーツにフットサル、サッカーが多いこと、野球（ソフト）、水泳、陸上競技などがあげられていた。今回の実践や調査研究は、教職員が今後の運動（スポーツ）の指導を考える機会になり、フットサルの指導の可能性を大きく広げることに繋がっている。

授業実践を担当した教職員からは、自身の実体験として「やってよかった」「こんなにできる」を実感でき、教師自身が達成感を得ることができたという感想が聞けた。本研究の大きな成果と考えている。やってみて分かる結果であり、授業を通して、教職員の生徒への思いが様々な工夫や改善に繋がっていったと考える。

（２）今後の課題

本校でフットサルの指導を進める際にも、教職員へのスポーツ指導に関する研修機会や試合等への出場のための課題、将来にわたって継続できるシステムの構築など、多くの課題が山積みのように感じる。本研究を通して、本校ではフットサルの指導を一步前へ踏み出すことができ、教職員の意識からも、児童生徒が将来、余暇活動としても楽しめる運動（スポーツ）の指導の必要性や「やってみたい」と考えていることがわかった。

本校のような義務併置の知的障がい校では、授業の中で運動（スポーツ）の指導の取組が必要と分かっているが、組織的に指導を行うことが難しいと感じている。今回、このような機会をいただいて、本研究に取り組んだことで、児童生徒にフットサルの授業を行い、児童生徒だけでなく、教職員にとっても大きな達成感を得ることができた。今後、各部が連携して、継続した指導の実践を重ねていきたい。

このような機会をいただいた、小野寺眞吾障がい者スポーツ振興会の皆様に心から感謝し、謝辞を表す。

V 資 料

1 授業の様子から （１）中学部





(2) 高等部



12月6日は、悪天候のため「稚内大谷高校との交流及び共同学習」は、中止。エスポラーダOBとの交流を中高生と参加で開催した。

2 教職員へのアンケート結果

※別紙資料 1

3 中学部、高等部指導案

※別紙資料 2

北海道稚内養護学校フットサル実践研究報告

担当者 中学部教諭 平川 亮一
高等部教諭 石川 徹

※協力者

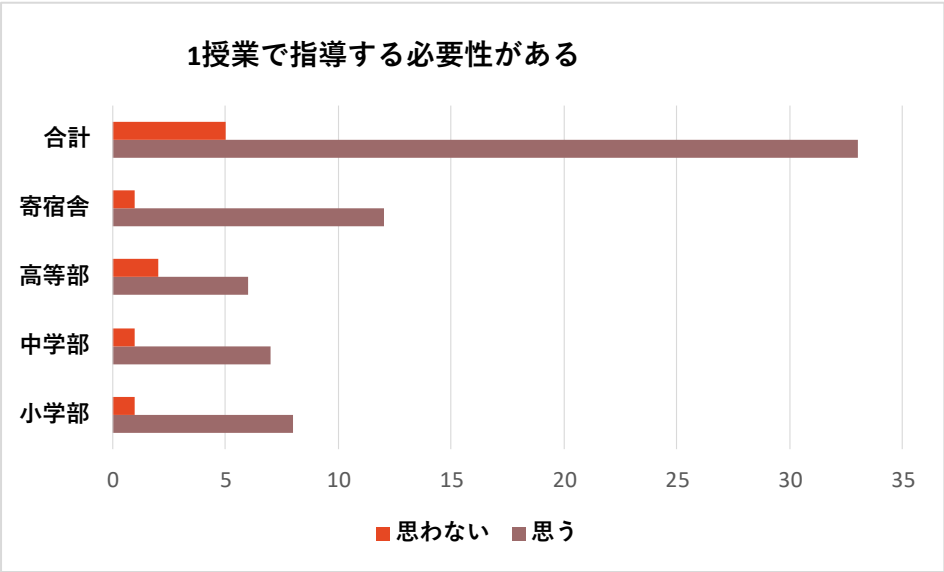
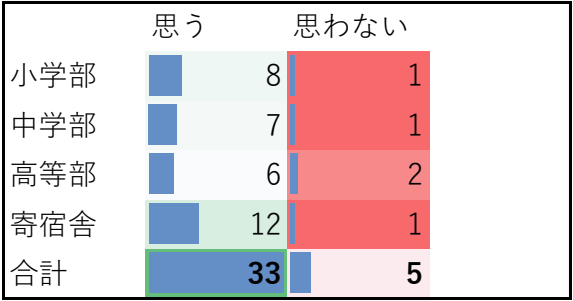
中学部「保健体育」担当

教諭 池西城太郎 教諭 池田 拓郎
教諭 小川ちさと 教諭 伊藤 円

高等部「保健体育」担当

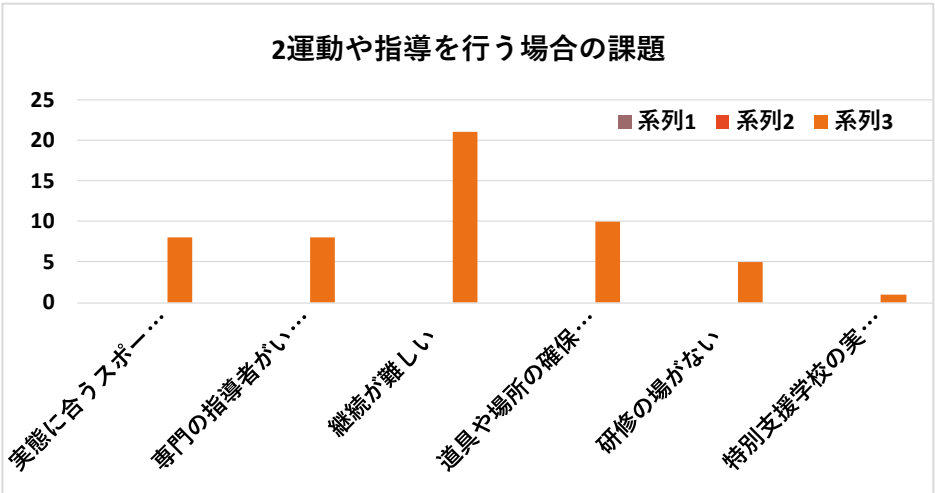
教諭 藤岡 康弘 教諭 杉本 富武
教諭 田中 郁江 教諭 田中 玖実
実習助手 房川 洋平

1生涯にわたって楽しめる運動（スポーツ）の指導が必要と思う



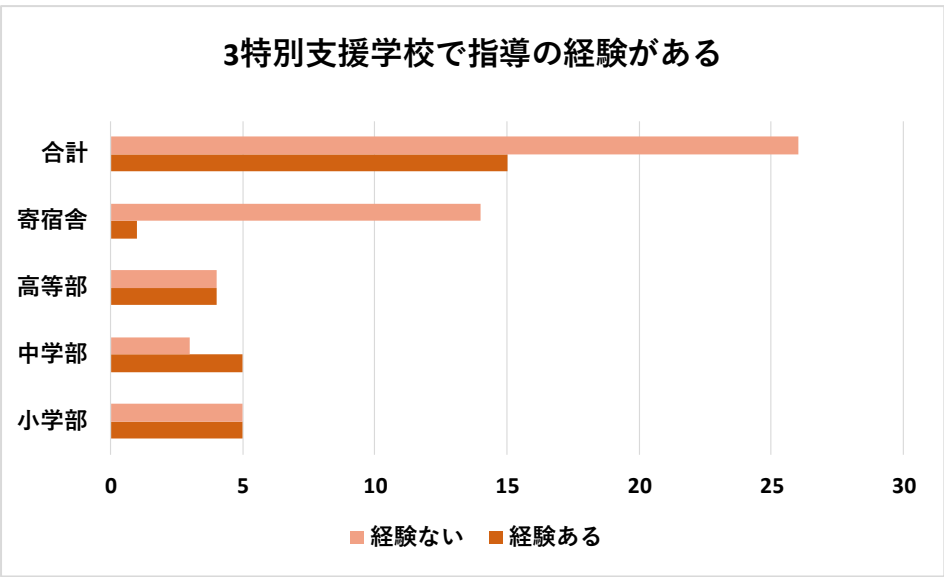
2 運動や指導を行う場合の課題

実態に合うスポーツがない	8
専門の指導者がいない	8
継続が難しい	21
道具や場所の確保が難しい	10
研修の場がない	5
特別支援学校の実績がない	1



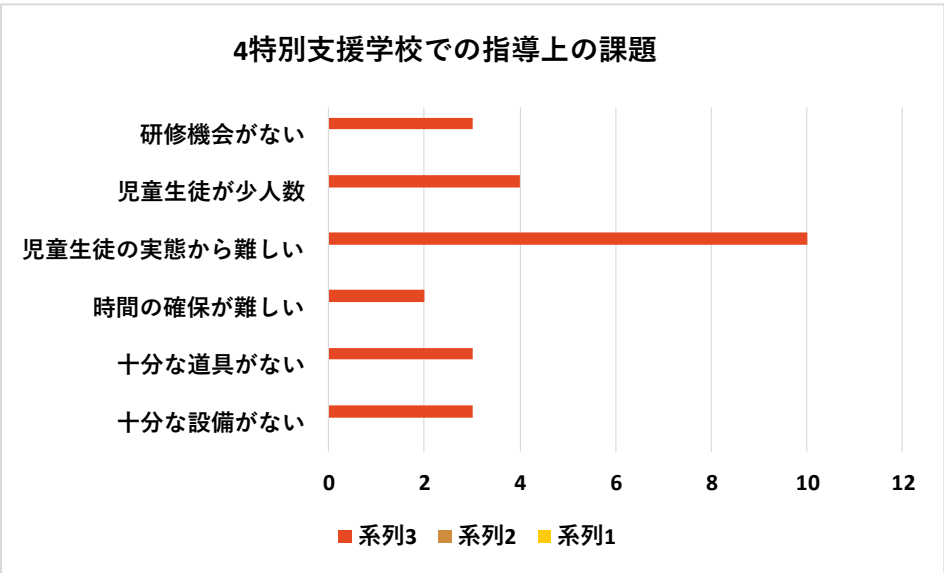
3 特別支援学校で運動（スポーツ）の指導の経験がある

	経験ある	経験ない
小学部	5	5
中学部	5	3
高等部	4	4
寄宿舎	1	14
合計	15	26



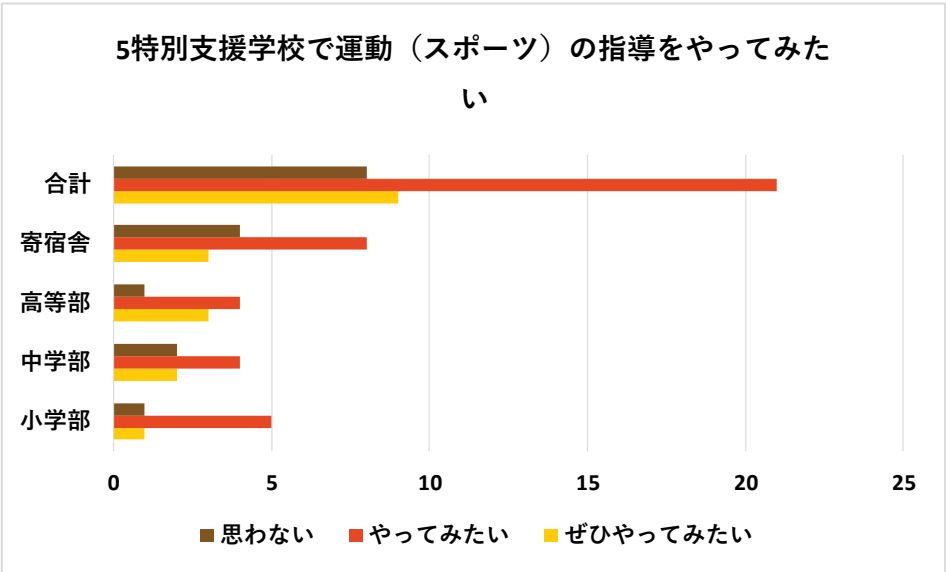
4 特別支援学校での指導上の課題

十分な設備がない	3
十分な道具がない	3
時間の確保が難しい	2
児童生徒の実態から難しい	10
児童生徒が少人数	4
研修機会がない	3



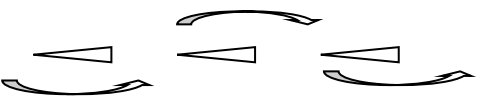
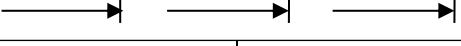
5特別支援学校で運動（スポーツ）の指導をやってみたい

	ぜひやってみたい	やってみたい	思わない
小学部	1	5	1
中学部	2	4	2
高等部	3	4	1
寄宿舎	3	8	4
合計	9	21	8



【別紙資料 2】

中学部 保健体育 学習指導略案

教科等	球技	題材名	フットサル		授業名	フットサル
授業日	平成 29 年 8 月 21 日 (月) 6 校時～ 平成 29 年 9 月 6 日 (月) 6 校時 全 5 回		場所	体育館	授業者	平川、伊藤、小川、東方
児童・生徒名	1 年：1 名 2 年：3 名 3 年：2 名 計 6 名	全体目標	・フットサルに必要な個人的技能（ドリブル・パス・トラップ）を習得する。 ・フットサルの楽しさを知り、安全に留意して運動する態度を身につける。 ・集団的スポーツとして、仲間と協力したり分かち合ったりしながら競技する。			
時 程	全体の学習活動	児童生徒の活動内容		指導者の働きかけ（指導内容・方法）および配慮事項（全体、個別）		教材・教具
13:20	1. 集合・挨拶 2. 健康確認 3. 本時授業内容説明 4. 準備体操	・代表者が挨拶する。 ・自分の調子を報告する。 ・話を聞く。 ・体育館内を 1 は 2 走る又は歩く。 ・手本を見ながら体操する。		・大きな声で挨拶できるように声掛けする。 ・生徒の体調を確認する（事前の情報共有を忘れずに）。 ・本時の流れを説明する。 ・基本的には見守り。前進しない生徒へ声掛け又は指差し。 ・身体的または口頭による補助や支援をする。		笛 ボール ゴール 防球ネット デジタルタイマー マーカー ラーコーン コーンバー
13:25	5. トラップ、キック、ドリブル (1)－1 足裏トラップ (1)－2 インサイドトラップ (2)－1 インサイドキック (2)－2 トーキック (3) 指導者に向かってドリブルまたは S 字ドリブル	・指導者と向かい合う。 ・指導者から転がってくるボールを足裏で止める。 ・指導者と向かい合う。 ・指導者から転がってくるボールをインサイドで止める。 ・指導者に向かって蹴る。 ・指導者に向かって蹴る。 ①指導者に向かって、蹴り進める。 ②S 字ドリブル		・手本 ・足裏を使って、その場で止めるように指導。 ・手本 ・インサイドを使って、その場で止めるように指導。 ・手本 ・片足で立ち、もう片方の内側を正面に向けて素振りの練習。左右の素振り ・身体的補助をして、形を覚える。 ・手本 ・つま先で蹴る。 ①程よく指導者が止める。蹴りやすい位置にコントロールする。 ②複数回繰り返す。		
		①  ② 		・ゴールめがけて、強く蹴る。 ・インサイドキックかトーキ		・手本 ・ゴールした際は、大いに盛り上げ、ゴール

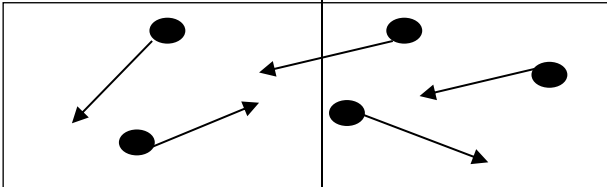
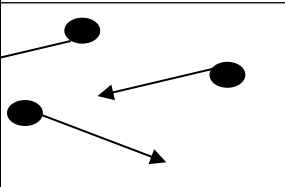
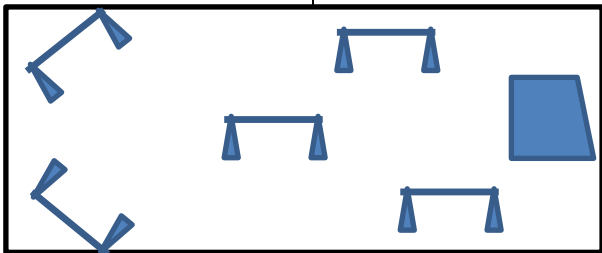
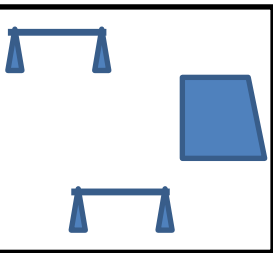
【別紙資料 2】

中学部 保健体育 学習指導略案

	6. PK 対決	ックを活用する。 ・皆で協力して、用具の片付けを行う。	する喜びが感じられるようにする。 ・片付けの指示出し。	
	7. 片付け	・怪我等が無いか報告する。 ・代表者が挨拶する。	・怪我等が無いか確認する。 ・大きな声で挨拶できるように声掛けする。	
	8. 集合・健康確認・挨拶			

【別紙資料 2】

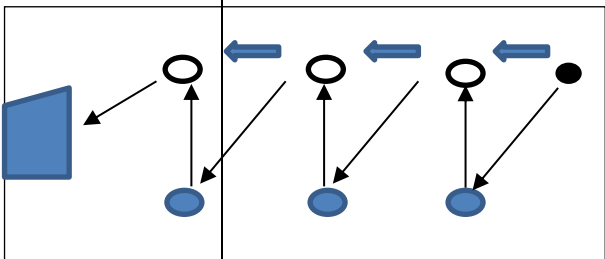
中学部 保健体育 学習指導略案

教科等	球技	題材名	フットサル		授業名	フットサル
授業日	平成 29 年 11 月 13 日（月） 6 校時～ 平成 29 年 12 月 4 日（月） 6 校時 全 6 回		場所	体育館	授業者	平川、伊藤、小川、東方
児童・生徒名	1 年：1 名 2 年：3 名 3 年：2 名 計 6 名	全体目標	・フットサルに必要な個人的技能（ドリブル・パス・トラップ）を習得する。 ・フットサルの楽しさを知り、安全に留意して運動する態度を身につける。 ・集団的スポーツとして、仲間と協力したり分かち合ったりしながら競技する。			
時 程	全体の学習活動	児童生徒の活動内容	指導者の働きかけ（指導内容・方法） および配慮事項（全体、個別）		教材・ 教具	
13:20	1. 集合・挨拶	・代表者が挨拶する。	・大きな声で挨拶できるように声掛けする。		笛 ボール ゴール 防球ネット デジタル タイマー マーカー カラーコーン コーンバー スコアボード ビブス	
	2. 健康確認	・自分の調子を報告する。	・生徒の体調を確認する（事前の情報共有を忘れずに）。			
	3. 本時授業内容説明	・話を聞く。	・本時の流れを説明する。			
	4. 準備体操	・体育館内を 1 又は 2 周走る又は歩く。	・基本的には見守り。前進しない生徒へ声掛け又は指差し。			
		・手本を見ながら体操する。	・身体的または口頭による補助や支援をする。			
13:25	5. グリッド内でドリブル	・各自ボールの準備 ・フリータッチ ・友達とぶつからないようにドリブル ・笛が鳴ったら止まる。または指示された部位で静止。	・教師を追わせたり、教師が呼んだりしながら、人とボールが動くように支援する。 ・足裏や膝、頭などの部位を使ってボールと止める。ボールへの感覚や様々な体の動かし方に取り組む。			
						
	6. フットサルコートボール	・旗門①～⑥を通過し、ゴールへシュートする。 ・友達又は教師とペアを組み、ドリブルやパス交換しながら行う。	・番号の位置を確認することで行き先の見通しをもたせる。 ・生徒によっては、教師が誘導しながら行う。 ・デジタルタイマーを設置して時間の意識づけを行う。			
						
	7. ミニゲーム	・指定されたチームに分かれて、ゲームを行う。 ・ゴールを決めた時には、仲間	・2 対 2、3 対 2、3 対 3 等ランダムにチーム編成を行う。 ・ビブスを着用して敵味方を確認する。			

		で分かち合う（スコア記入等）。 ・皆で協力して、用具の片付けを行う。 ・怪我等が無いか報告する。 ・代表者が挨拶する。	合わせてゴールする方向も伝える。 ・ゴールに向かってプレーできるように補助、助言等を行う。 ・片付けの指示出し。 ・怪我等が無いか確認する。 ・大きな声で挨拶できるように声掛けする。	
	8. 片付け 9. 集合・健康確認・挨拶			

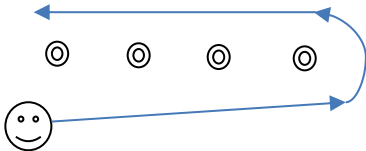
【別紙資料 2】

中学部 保健体育 学習指導略案

教科等	球技		題材名	フットサル		授業名	フットサル
授業日	平成 29 年 12 月 11 日（月） 6 校時～ 平成 29 年 12 月 20 日（月） 6 校時 全 4 回			場所	体育館	授業者	平川、伊藤、小川、東方
児童・生徒名	1 年： 1 名 2 年： 3 名 3 年： 2 名 計 6 名	全体目標	・フットサルに必要な個人的技能（ドリブル・パス・トラップ）を習得する。 ・フットサルの楽しさを知り、安全に留意して運動する態度を身につける。 ・集団的スポーツとして、仲間と協力したり分かち合ったりしながら競技する。				
時 程	全体の学習活動	児童生徒の活動内容		指導者の働きかけ（指導内容・方法） および配慮事項（全体、個別）		教材・ 教具	
13:20	1. 集合・挨拶 2. 健康観察 3. 本時授業内容 説明 4. 準備体操	・代表者が挨拶する。 ・自分の調子を報告する。 ・話を聞く。 ・体育館内を 1 又は 2 周走る又は 歩く。 ・手本を見ながら体操する。		・大きな声で挨拶できるように声掛け する。 ・生徒の体調を確認する（事前の情報 共有を忘れずに）。 ・本時の流れを説明する。 ・基本的には見守り。前進しない生徒 へ声掛け又は指差し。 ・身体的または口頭による補助や支援 をする。		笛 ボール ゴール 防球ネッ ト デジタル タイマー マーカー カラーコー ン コーンバ ー スコアボ ード ビブス	
13:25	5. 壁パス&シュ ート	・指導者にパス。目標地点へ移動。 指導者からパスを受ける。続けて 進み、最後にシュート。		・手本を見せる。 ・パス後、素早く移動することを伝える。 又は補助する。 ・ゴールに近づいたらシュートするこ とを伝える。又は補助する ・慣れてきたら DF を入れ、パスする 意味理解を図る。			
							
	6. 対戦 1 対 2 2 対 3 3 対 3 5 対 5 等	・仲間と協力して、得点したり守 備したりする態度を身に付ける。 ・対戦（試合）には勝敗がつくこ とを学ぶ。 ・喜びや悔しさを共有し、分かち 合う。		・指示や補助しながら、得点や守備が できるように支援する。 ・勝敗を知り、次試合の意欲付けを図 る。 ・生徒の気持ちを引き出すために、試 合後に感想発表やチーム反省を設定す る。			
	7. 片付け	・皆で協力して、用具の片付けを 行う。		・片付けの指示出し。			
	8. 集合・健康確 認・挨拶	・怪我等が無い報告する。 ・代表者が挨拶する。		・怪我等が無い確認する。 ・大きな声で挨拶できるように声掛け する。			

【別紙資料2】

高等部 保健体育 学習指導略案

教科等	球技	題材名	フットサル		授業名	フットサル
授業日	平成 29 年 11 月 2 日（火） 6 校時～ 平成 29 年 11 月 14 日（火） 6 校時 全 4 回		場所	体育館	授業者	石川、杉本、田中郁、 藤岡、豊島、田中玖、 房川
生徒名	1 年： 2 名 2 年： 4 名 3 年： 6 名 計 12 名	全体目標	・基本的なルールや初歩的な運動技能を理解し、ボールに慣れることができる。 ・自分の順番やきまりを守ることができる。			
時 程	全体の学習活動	児童生徒の活動内容		指導者の働きかけ（指導内容・方法）および配慮事項（全体、個別）	教材・教具	
13:20	0. 準備	・指示された用具を準備する。		・時間になったら始める。遅れてくる生徒は待たない。	ホワイトボード	
	1. 集合・挨拶 2. 本時授業内容説明 3. 準備運動	・代表者が挨拶する。 ・話を聞く。 ・体育館内を 3 周または 2 分間走る。 ・手本を見ながら柔軟体操する。 ・補強運動をする。		・本時の流れを説明する。 ・併走したり、声をかけたりしながらペースを保つように指導する。 ・様々な動きの模倣をさせ、バランス感覚や柔軟性の向上を図る。 ・体幹や股関節、下半身などフットサルの動きにつながるようなトレーニングをする。意識するポイント等を説明しながら行う。		
13:35	4. ①ボールタッチ	・足裏、インサイド、アウトサイドを使って 6 m ドリブルで進み、ターンして戻る。→次の人にタッチ。 		・手本を見せる。ボールが体から離れないように指導する。 ・足裏を使って、その場で止めるように指導する。	ボール マーカ―	
	②ボールストップ →パス	・正面から来たボールを足裏で止め、インサイドキックで返す。		・足の内側に目印のテープを貼り、ボールに当たる位置に注目して蹴るように指導する。		
	③サークルパス	・ 6 ～ 7 人ひと組になり、バスケットボースのサークルラインに沿って内側を向いて等間隔に並ぶ。		・ボールが逸れたときは、1 ～ 2 歩移動してボールをサークルから出さないで止めるように指導する。		

14 : 10	④シュート ⑤ドリブルシュート 5. 片付け 6. まとめ	・パスを出したい相手の名前を呼び、インサイドキックでパスを出す。 ・正面、右、左の3カ所から出されたボールをシュートする。 ・パスを止め、指導者の後方を大きく回り込み、小さく出されたパスを受けてシュートする。 ・全員で片付けをする。 ・本時の振り返りをする。	・ボールを出す位置に平たいマーカーを置く。 ・走ってボールを見てシュートをするように指導する。 ・回り込んで走った後に、生徒の実態に合わせてパスのコースやスピードに変化を付けるようにする。 ・体調を崩したり怪我をしたりした生徒がいないか確認をする。	ボール マーカー ゴール コーン
---	---	--	--	--

【別紙資料2】

高等部 保健体育 学習指導略案

教科等	球技	題 材 名	フットサル	授業名	フットサル
授業日	平成 29 年 11 月 16 日 (木) 6 校時～ 平成 29 年 12 月 5 日 (火) 6 校時 全 5 回	場所	体育館	授業者	石川、杉本、田中郁、 藤岡、豊島、田中玖、 房川
生徒名	1 年：2 名 2 年：4 名 3 年：6 名 計 12 名	全 体 目 標	・空間に走ってパスを受ける、左右にパスを出すなどの発展した動きをすることができる。 ・きまりを守り、仲間と協力して行うことができる。		
時 程	全体の学習活動	児童生徒の活動内容	指導者の働きかけ（指導内容・方法）および配慮事項（全体、個別）	教材・教具	
13:20	0. 準備 1. 集合・挨拶 2. 本時授業内容説明 3. 準備運動	・指示された用具を準備する。 ・代表者が挨拶する。 ・話を聞く。 ・体育館内を 3 周または 2 分間走る。 ・手本を見ながら柔軟体操する。 ・補強運動をする。	・時間になったら始める。遅れてくる生徒は待たない。 ・本時の流れを説明する。 ・併走したり、声をかけたりしながらペースを保つように指導する。 ・様々な動きの模倣をさせ、バランス感覚や柔軟性の向上を図る。 ・体幹や股関節、下半身などフットサルの動きにつながるようなトレーニングをする。意識するポイント等を説明しながら行う。	ホワイトボード	
13:35	4. ①対人パス ②パス&ゴール→シュート	・二人一組になり、3～4 m の距離で対人パスをする。 ・パスを出して走り、最後はシュートをする。 ・前の人が半分を過ぎたら次の人がスタートする	・ボールが逸れたときに近い方の足で止め、体勢を整えてからパスを出すように指導する。 ・指導者を 3 カ所に配置し、ポスト役となってパスを出す。	ボールマーカー	

	③ゲートボール	・二人一組になり、点在する①～⑤のゲートの間を順番にボールを通す。全部クリアできたらシュートする。受け手と蹴り手が交互になるように行う。	・ゴールキーパー役を指導者が行う。	ボール マーカ ー ゴール コーン バー
14 : 10	5. 片付け 6. まとめ	・全員で片付けをする。 ・本時の振り返りをする。	・体調を崩したり怪我をした りした生徒がいないか確認 をする。	

【別紙資料2】

高等部 保健体育 学習指導略案

教科等	球技	題材名	フットサル		授 業 名	フットサル
授業日	平成 29 年 12 月 7 日（木）6 校時～ 平成 29 年 12 月 19 日（火）6 校時 全 4 回		場 所	体育館	授 業 者	石川、杉本、田中郁、藤岡、豊島、田中玖、房川
生徒名	1 年：2 名 2 年：4 名 3 年：6 名 計 12 名	全 体 目 標	・試合の中で、自分の役割に気付き、ルールに沿って協力して活動することができる。			
時 程	全体の学習活動	児童生徒の活動内容	指導者の働きかけ（指導内容・方法）および配慮事項（全体、個別）		教材・教具	
13:20	0. 準備 1. 集合・挨拶 2. 本時授業内容説明 3. 準備運動	・指示された用具を準備する。 ・代表者が挨拶する。 ・話を聞く。 ・体育館内を 3 周または 2 分間走る。 ・手本を見ながら柔軟体操する。 ・補強運動をする。	・時間になったら始める。 遅れてくる生徒は待たない。 ・本時の流れを説明する。 ・併走したり、声をかけたりしながらペースを保つように指導する。 ・様々な動きの模倣をさせ、バランス感覚や柔軟性の向上を図る。 ・体幹や股関節、下半身などフットサルの動きにつながるようなトレーニングをする。意識するポイント等を説明しながら行う。		ホワイトボード	
13:35	4. ①パス→ドリブル ②2 人対 2 人 or 1 人試合（1 分間～3 分間）	・正面からのパスを止め、返し、相手の後ろを通過してドリブルで戻ってくる。→次の人にタッチ ・体育館の反面で試合をする。 ・チームの人数が少ないので、パスをするか、ドリブルで進むかの 2 択。 ・その都度対戦相手やメンバーを変えて、様々な仲間、相手と対戦できるようにする。	・生徒の実態に応じてパスをする距離や強さを変える。 ・指導者もチームに入ったり対戦相手になることで生徒を効果的に動かすことができるようにする。		ボール ボール ゴール ビブス	

14 : 10	※発展 ・フットサルと似た動きであるユニホックを行う。 5. 片付け 6. まとめ	・壁にぶつかってもプレーは継続とする。(アイスホッケー式) ・赤と緑のスティックでチームを分け、2対2の試合をする。 ・弱視の生徒もいるので、蛍光カラーの鈴入りボールを使用する。 ・全員で片付けをする。 ・本時の振り返りをする。	・スティックの安全な使用方法と留意点について説明する。 ・体調を崩したり怪我をしたりした生徒がいないか確認をする。	スティック 蛍光鈴ボール
---------	--	--	--	-----------------

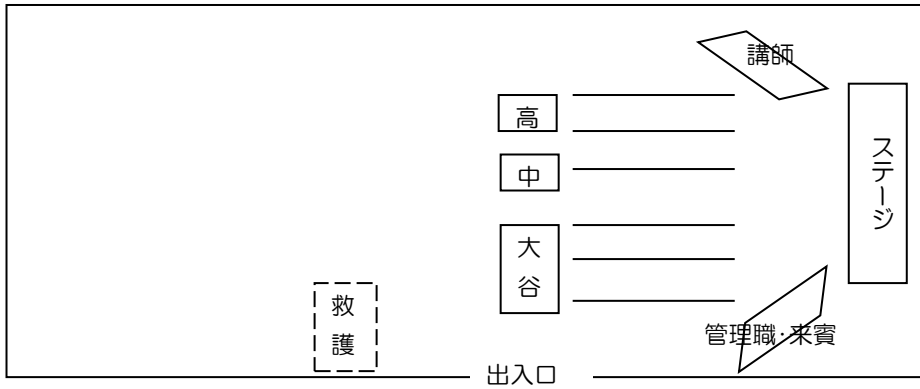
「フットサル普及事業」及び「大谷高等学校交流」 学習指導略案

教科名	総合的な学習 の時間	題材名	フットサル普及事業 及び 稚内大谷高等学校交流			授業名	フットサル交流
日時	平成 29 年 12 月 6 日 (水) 13：30～15：00						
指導者	中高教職員	場 所	体育館	生 徒	中学部生徒：8名、高等部生徒：13名 稚内大谷高校生徒：19名		
目的	フットサルの楽しさとフットサル活動をより充実するための基本的、基礎的技術を学び、フットサルへの 興味・関心が高まるようにする。						
日時	学習内容		生徒の活動及び配慮事項		教師の働きかけ（指導内容・方法）		
13：25 13：30	体育館集合 開会式 開会の言葉 歓迎の言葉（養護） 講師紹介 自己紹介（講師より）		整列・挨拶 着席（フロア上）		講師到着予定 12：30～13：00 大谷高到着予定（13:20） 進行：石川 高木教頭 中学部代表：橋本 首藤校長 吉田講師、笠間講師、市場講師より ※リフティング実演		
13：40	準備体操 ブラジル体操見学		・体操隊形に広がり、準備体操を する。		体操：平川 ブラジル体操：大谷高生実演		
13：45	フットサル交流開始 説明：平川 2コート責任者		・説明を聞いた後、2コート分か れる。		・コート及びチーム名簿掲示 A：平川（入り口側） B：石川（グラウンド側）		
13：50	① ボールタッチ ② 対人パス		・ドリブルから足裏や胸等で止め る。 ・大谷生と本校生徒でペアを組み、 約3mの距離で1対1の対人パ スをする。		・笛の合図で、指定された部位で停止。 ・講師の2人には巡回してもらい、賞賛 やアドバイスを。 ※1人でボールを止める・蹴るが難しい 場合は状況に応じて支援する。（以下同 様）		
13：55	③ パス＆ゴー →シュート		・大谷生は各ポイントに立つ。 ・本校生徒はパスを出して走り、 最後はシュートをする。 ・前の人が半分以上を過ぎたら次の人 がスタートする		・待機している生徒の掌握等。		
14：10	④ ーA（ステージ側） ・ゲートボール競争 進行：平川		・講師の2人の手本を見る。 ・大谷生と本校生徒で二人一組の ペアをつくる。 ・①～⑤の点在したゲートの下を 蹴り手と受け手が交互になるよ うに順番に通していく。 ・ゲートの下をうまく通らなかつ た場合はその時点からやり直 す。		中）小玉、橋本、福沢、 高）稲津、生出、小坂、長谷川、新谷、 高木、船木 大谷）10名		

		・全てのゲートを通すことができたならば最後はゴールにシュートを決める。 ・ここまでのトータルタイムを計り、順位付けをする。	・タイム計時：平川 ・タイムの記入。
	③ ーB（用具庫側） ・キックザターゲット 進行：石川	・大谷生と本校生徒の混合チームを2つ作り、分かれる。 ・ビブス着用（青、黄） ・各チーム交互に一人ずつ順番に蹴っていく。 ・1～9の的を狙い、ボールを蹴って当てる。 ・的にボールが当たるかの的が抜ければ得点とする。 ・2枚抜きもありとする。 ・全員蹴り終わって多くの的に当てたチームの勝ちとする。	・的にボールが当たったらの的を直す。 ・対戦表に○×を記入し集計する。：石川 中）金山、小島、加藤、阿部 高）杉澤、水戸部、伊庭、富谷、肥後、西谷内 大谷）9名
14：25	④ 選抜試合 3分程度	・本校選抜生徒、大谷高選抜生、講師2名の計16名で、4名1チーム編成、2試合実施する。 ・他の生徒はステージ上で応援する。	・ビブス着用（黄、紺、赤、緑） 黄）小玉、橋本、福沢、 <u>笠間、市場</u> 紺）水戸部、稲津、小坂、船木、 <u>吉田</u> 赤）大谷高4名 緑）大谷高4名
14：35	⑤ ガチンコ対決試合 7分程度	・講師2人プラス大谷生の混合チームと大谷生チームが対戦するデモンストレーションを観戦・応援する。	・4対4のSpecialマッチ 黄色）講師3名＋指導者1名 ユニ）大谷高4名
14：45	記念撮影	中央に講師 選手周りに車椅子生徒 更にその周りを各校生徒で入り混じりながら。	ステージをバックに撮影 パイプ椅子の準備（2列分）
14：50	閉会式・終了（15：00） 閉会の言葉 感想発表 御礼の言葉（大谷） 講師より一言 学校長挨拶 諸連絡	整列	進行：平川 高木教頭 高等部代表：長谷川 大谷高代表：主将より 吉田講師より 首藤校長
用 具	横断幕、講師席（長机1、パイプ椅子2）、 フットサル用ボール複数個、コーン大：10 個、コーンパー：5本、ゴール：1対、キックザターゲット、 脚付きデジタルタイマー：1台、フラットマーカー、防球ネット（仕切り用）：10台、ビブス、マイク：2 本、パイプ椅子十数台（写真撮影用）		
備 考	・本校児童生徒の実態に合わせて適宜休憩を（ステージ上、競技中使用可）。		

会場図

●開閉開式

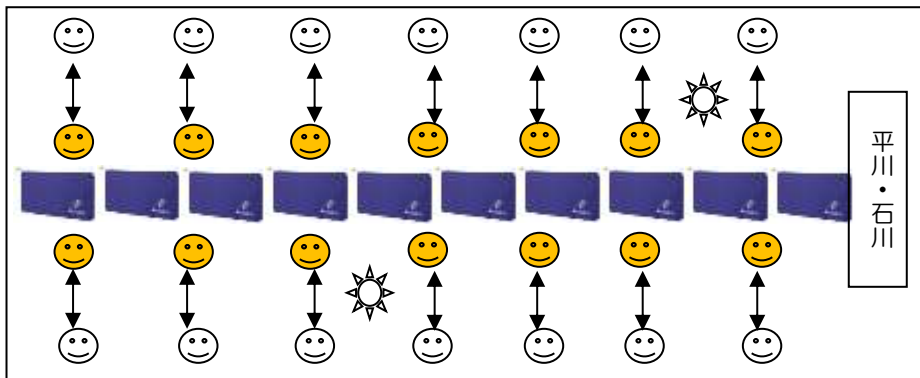


① 対人パス

☺ …養護学校生徒

☺ …稚内大谷生徒

☼ …エスポラーダ講師

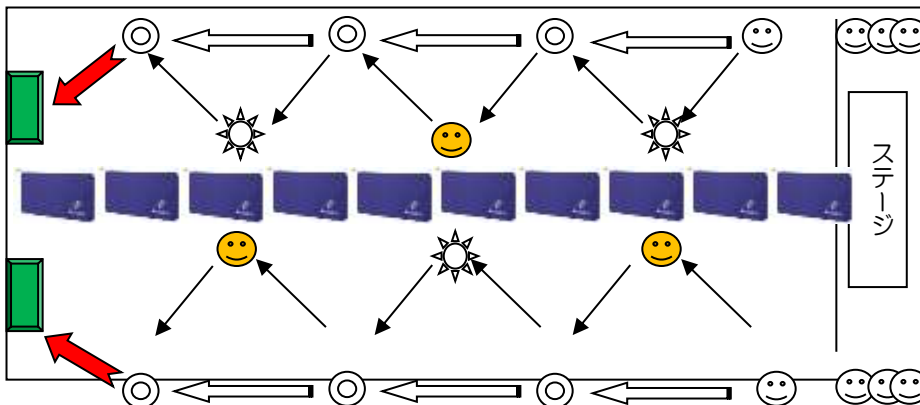


② パス&ゴー → シュート

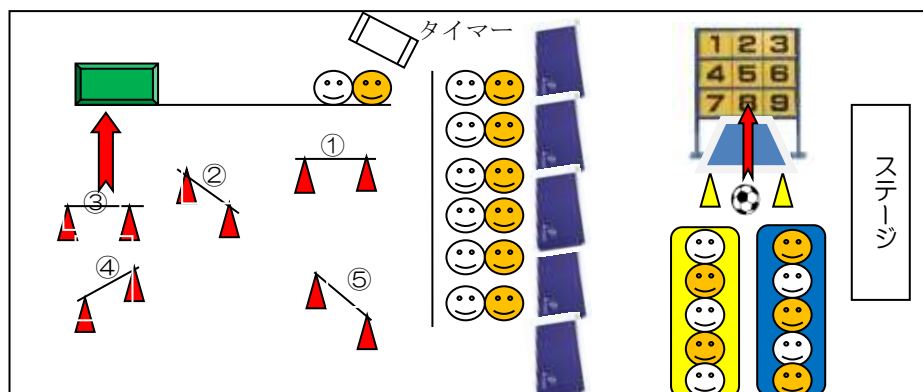
← …パス

← …走る

← …シュート

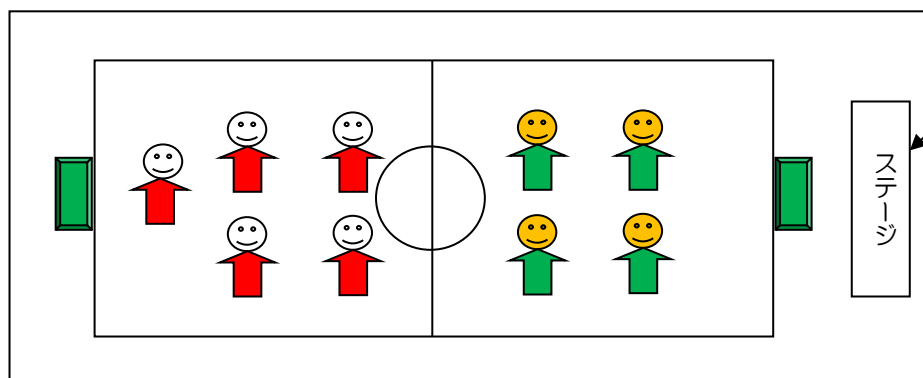


- ③ ーA ゲートボール競争（ステージ側）
 ーB キックザターゲット（用具庫側）



③ 選抜試合

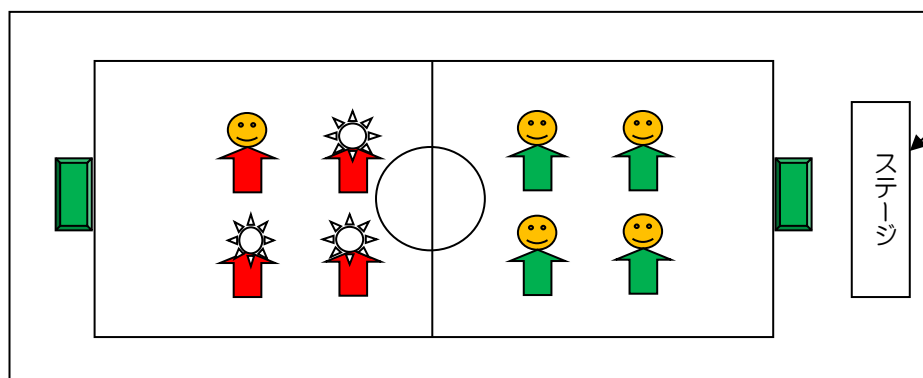
- ・ 4名1チーム 黄対赤 紺対緑



※養護学校生徒
 稚内大谷生徒
 応援場所

④ ガチンコ対決試合

- ・ 講師&大谷選抜生徒（赤ビブス着用・用具庫側）
 ・ 稚内大谷選抜生徒（緑ビブス着用・ステージ側）



※養護学校生徒
 稚内大谷生徒
 応援場所

I 研究テーマ設定の理由

本校はフットサル指導について、これまで部活動や体育授業で冬期間の室内運動の一つとして取り上げているのみであった。しかし、今年度より小野寺眞悟杯の開催をきっかけに全校生徒にフットサル同好会の参加を呼びかけたところ、全校生徒の3割が参加を希望した。本校生徒のフットサルへの興味関心の高さを受けて、地域資源・人材を活用した指導や特別支援教育におけるフットサル指導の工夫をまとめ、フットサル指導の充実を図るため研究テーマを設定した。

II 学校の実態

本校は開校から21年目を迎えたオホーツク管内唯一の職業学科設置の特別支援学校である。今年度の総生徒数は100名で、本校に入学してくる生徒は知的障害を主障害として診断されているが、協調性運動障害や自閉症スペクトラム症候群なども併せて診断されている生徒が多い。本校がある紋別市は人口約2万3千人でオホーツク海に面しており、水産加工業が盛んである。そのため本校は現場実習や作業学習で開校から水産加工業を中心とした地域とのつながりが強い。教職員数は100名在籍しており、39歳以下が7割弱と非常に若い年齢層の教職員が在籍している。

III 実践研究の内容・方法

1 指導内容

(1) 体育授業において「将来の余暇活動にしたくなるフットサルの学習」

ボールネットを使った学習、対面パス、四角形のパス、ボールタッチリレー、シュート学習、すれ違いドリブル学習、サバイバルゲーム、用具やポジションの知識などの学習

(2) フットサルに興味がある同好会を対象に「チームの一体感を目指した練習」

ブラジル体操、対面ボールコントロール、四角形のパス、顔を上げたドリブル練習、動くボールのシュート練習、攻守の切り替えからのピ

ヴォ当ての動き、ゴレイロの基礎技術、ゲーム

(3) 小野寺眞悟障がいスポーツ振興会フットサル指導派遣を活用した地域交流

元エスボラダ選手による外部講師指導、地域小学生とフットサルを通じた交流

2 指導方法

(1) 男女別チームティーチングによる指導

(2) 能力別や選手団別、ポジション別による小集団での指導

3 指導期間等

(1) 教科学習

(2) 同好会（本校教職員）

IV 指導の記録

1 体育指導の様子



(図1 ボールネットを使った学習)

図1はボールネットを使った学習。ボールに慣れるため使用した。初心者やサッカー・フットサルが苦手な生徒のつまづく要因の一つとして、自分で蹴ったボールをコントロールできずに遠くへ飛ばし、ボールを取りに行くということを繰り返してしまうことがあった。これでは足でボールを扱うことに慣れる前に諦めてしまうため、まずは単調ではあるが紐でつながったボールを蹴るということを学習の初めに必ず行った。



(図2 ボールタッチリレーの学習)

図2はボールタッチリレーの様子である。フットサルでは足裏をよく使うことを指導した後に、足裏を使ってボールタッチをしながら仲間のところまで移動してバトンタッチをするリレーを行った。負けた方が片づけをするなどのペナルティーを付けることで、競い合いながら技術の上達を促すことができた。



(図3 シュート練習)

図3はシュート練習の様子。シュートはパスと違い、ダイナミックにボールを力いっぱい蹴るよう指導した。力いっぱい蹴ることを意識することで助走の仕方や足の振り方などを自分で考えたり、ストレス発散するように楽しんで取り組んだりする生徒もいた。また、体育館で行う中で強いシュートを打つ生徒もおり、ゴールの裏にマットを立て、安全に学習ができるよう環境整備を行った。



(図4 ミニゲームの様子)

ミニゲーム(図4)ではボールがあるところに偏らないように指導した。周りの生徒は声を出して名前を呼んだり、指示を出したりするようになってきた。



(図5 フリーマンを入れたミニゲーム)

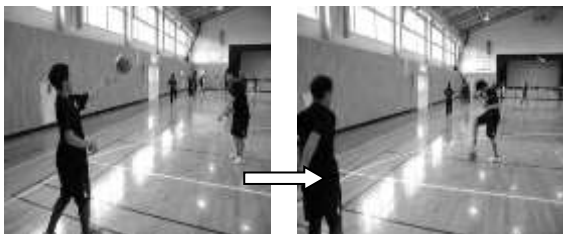
初心者やフットサルを苦手としている生徒には図5のように指導者がフリーマンとして入るミニゲームが効果的だった。奪い取ったボールをどのように攻撃につなげてよいかわからず、ただの蹴り合いになってしまうことが多かったが、フリーマンがいることで、奪い取ったボールはとりあえずフリーマンに預けるという目標ができ、ボールを預けている間に攻め上がったり、シュートが打てる位置まで移動したりして、ゲームの楽しさを味わわせることができた。

2 フットサル同好会の様子



(図6 ブラジル体操)

フットサル同好会ではウォーミングアップにブラジル体操(図6)を取り入れた。体をほぐすのみではなく、声を出し、リズムに合わせて同じ動きを行うことでチームとしての一体感をつくることをねらった。少し複雑な体操も取り入れたため、初めは覚えるのに時間がかかったが、大会が近づいたころには生徒が積極的に声を出し、取り組む様子が見られた。



(図7 浮き球の足裏トラップ)

パスやドリブル、シュートの練習をする前に必ず行ったのがボールコントロールの練習である。浮き球を足裏でタイミングよく抑えてトラップをするというものだが、この練習を選んだ理由としては、一人でも行うことができるボールコントロールの練習だからである。パスやドリブル、シュートの練習は相手やスペースがないとできないが、ボールコントロールの練習はボールと自分が立っているスペースさえあればどこでもできる練習である。また、フットサルの技術を上達するために身に付けなければならない技術の一つとして浮き球の処理があると考え。生徒の多くはゲーム中、浮き球で飛んでくるボールに対して体のどの部分をどのように動かして反応すればよいかわからず、立ち止まっていた。そこで、浮いているボールをコントロールするというのを練習時間だけでなく、練習前の自主練や休日の余暇の時間で一人または二人でできる練習として取り入れた。



(図8 浮き球をトラップする初期段階)

浮き球を足裏でトラップする技術の習得にまずく生徒の中には飛んでくるボールに対して足裏で上から抑えなければならないという意識が強くなり、足を大きく振り上げてボールを待つという生徒が多かった。(図8)



(図9 ドリブル練習の様子)

ドリブル練習の工夫としては、高さのないマーカーを置くのではなく、できるだけ高さのあるコーンを置いた八の字ドリブルを取り入れた。視線が上がった状態でも障害物が見えるようにし、視野を確保できるように工夫した。



(図10 パス練習の様子)

四角形に回すパス練習の中では図10のようにマーカーを二つ置き、その間にボールが通るようにパスをするよう指導した。



(図11 フットサル同好会のメンバー)

今回、研究費の一部で同好会のユニフォームを購入させて頂いた。生徒のモチベーションが上がり、大会への意識が一層強くなった。このような環境整備もフットサル技術の上達には欠かせないと感じた。(図11)

3 小野寺慎吾杯の様子



(図12 小野寺慎吾杯開会式の様子)

生徒たちにとってこれだけの規模の大会はもちろん初めてであった。また、同じ年代の特別支援学校の仲間との交流もほとんど経験したことがなかった。緊張感漂う会場の雰囲気にも本校の選手やサポートメンバーの生徒だけではなく、引率の指導者も不安や期待に満ち溢れていた。生徒たちは普段の学校生活では決してできないであろう経験を得ることができた。(図12)



(図13 試合の様子)

大会では一勝も上げることはできなかったが、今までの練習の物足りなさを痛感しながらもチームで一致団結して試合に臨むことができた。(図13)



(図14 試合後や宿舎での様子)

試合後は力の差を痛感し、涙が止まらない生徒もいた。しかし、このような悔しい経験をした後に立ち直る力は将来社会に出て、つまずいたときに必ず役に立つということを生徒に伝えることができた。(図14)



(図15 吉田さんとの出会い)

生徒たちは会場の片付けを手伝わせていただき、改めて大会の規模の大きさや大会に携わっているスタッフの多さに気づかされていた様子であった。また、会場で生徒たちが自由にボールを蹴っていた際、元エスポラーダ選手の吉田さんが参加してくださり、生徒たちはプロの技術を前に目が輝いていた。(図15)

4 紋別高等養護学校フットサル交流会の様子



(図16 紋別地域交流会の様子)



(図17 紋別地域交流会の様子)

平成29年11月7日に行った「紋別フットサル交流会 in 紋高養」では地域の小学校やサッカー少年団、中学校にも参加を呼びかけた。紋別市サッカー協会や紋別市教育委員会の協力もあり、当日は地域の小学生11名が参加し、本校生徒とフットサルを通じた交流することができた。

また、この日は体育の授業でもフットサルを行い、2, 3学年の合同体育として約70名の生徒が吉田氏、笠間氏の指導を受けた。初めて目の当たりにするプロの技術に生徒は刺激を受けたり、感動したりしていた。フットサル同好会の生徒は小野寺眞悟杯で吉田氏と出会っており、この日をとても楽しみにしているようであった。

V 実践研究の成果と今後の課題

1 実践研究の成果

(1) 特別な支援を必要とした生徒へのフットサル指導方法の工夫

本校のフットサル同好会の活動時間は月～木曜日の週4回、放課後の50分間で、体育館をバスケットボール部と半面で分け合いながら練習を行った。時間と場所そして期間が限られている中、初心者や経験者または男女混合で活動するに当たって、生徒が意欲を持って参加し続けられる練習内容を精選し、下記のようなねらいで指導した。

ア ボールネットを使ったウォーミングアップ

初心者は特にボールを足で扱うことに慣れていなく、活動時間できるだけ足でボールに触る回数を増やすため、使用した。サッカーやフットサルは上級者になるほど繊細で柔らかいタッチができるようになるが、初心者はまず、ダイナミックに蹴りたがる生徒が多い。しかし、強く蹴ってしまうとボールが遠くに離れて、ボールを追いかけるばかりの活動になってしまい意欲の低下につながる。そこで、初心者や練習の準備段階においてボールネットを使用したウォーミングアップを行うことでボールを蹴ることへの慣れや意識づけをねらい、取り入れた。

イ ブラジル体操

短い期間でチーム全体の一体感を持たせるために行った。複雑な動きは入れず、全員で声を

合わせて行える準備体操として取り入れた。

ウ ボールコントロール練習

基本的なボールを「蹴る」「止める」については対面パスなどを行ったが、飛んでくるボールに対して恐怖感を感じたり、どのように身体を動かせば良いかを分らないなど、空間認知が難しい生徒が多かったため、飛んでくるボールが地面に着く瞬間に足裏で抑える練習を行った。初めは足を出すタイミングが分からない生徒が多かったが、上手なトラップの体育館に響くボールの音に注目し、「タン・タン・タン」ではなく「タタタン」になるよう指導した。また、空間にあるボールの動きを捉えた上級者は足をあまり上げずに抑えるなど見本を示しながら指導した。

エ その他

ドリブルやシュートなど基本的な練習は行ったが、今回の実践では特にフットサルを行うに当たっての一体感や意欲、楽しさをねらって行った。その結果、3ヵ月後には自ら積極的に練習し、ボールの扱いもかなり上達した生徒が多かった。

(2) 生徒が地域や仲間から応援してもらえたという経験

今回、フットサル同好会の取り組みを進めるに当たって、紋別市サッカー協会や旭川の社会人フットサルクラブ (Divertido 旭川など) に外部指導の相談等を行ったが、日程が合わず大会までに行うことができなかった。そのかわり、同好会を立ち上げるという本校の新しい試みを地元紙が取り上げ、取材を受けることになった。同好会の代表と3年生の代表がインタビューに答えたり、練習の様子を地元紙の記者に撮影していただいたりするなど、生徒たちは地元の応援を受けているという経験を得ることができ、学校の代表ではなく紋別の代表として大会に臨むという大きな責任を得ることができた。また、大会に選手として参加する生徒の他に、サポートメンバーとして帯同する生徒や保護者の都合で不参加になった生徒などチームの中でも立場が分かれた。そこで、応援側の生徒はパス出し

やボール広い、声出しやゲームの相手役など練習を通して選手団が少しでも大会でがんばれるようにサポートを行った。「チーム」とは選手団だけではなく、フットサル同好会に関わる全ての人たちがチームであるということを意識することで、一人一人の役割を生徒自身が自覚することができた。選手団は地域や仲間から応援してもらったという経験を背に大会に臨むことができた。大会は1勝もすることができなかったが、生徒たちは試合に負けたときに普段涙を見さないような生徒たちも含めて悔しくて涙を流していた。たくさんの人々に応援してもらった責任感があったからこそ流した涙であると考えている。

(3) フットサルを「行う」のみではなく、「知る」「見る」「支える」ことの学習

本校部活動ではバスケットボール部が対外試合として毎年、他校へ出向き大会に参加しているが、それ以外では他校や同年代の交流は少ない現状があった。今年度に初開催となった小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会に本校が参加したことで、他校との力の差を知ることができ、大会の決勝戦ではレベルの高さを見ることもできた。このことによって生徒は向上心を持ち、「もっと上手になって来年度も必ず出たい」と話す生徒もいた。また、大会運営の中で、受付や準備、片付けの業務を生徒たちは経験させていただき、一つのスポーツにおいて選手だけではなく、運営や支援など支える方々がいなければ成り立たないということを学習することができた。

このような一つ一つの経験が生徒たちにとって「生きる力」となり、生涯にわたって学び続ける基礎になると改めて感じた。

(4) フットサル技術指導員派遣事業の活用

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会の技術指導員派遣事業を活用させていただき、平成29年11月7日(火)にエスポラーダ北海道OBである吉田順省氏、笠間慎也氏による体育授業と地域交流会を計画実施した。体

育授業は2,3年生(70名程度)を対象に「フットサル」を題材に講義と実技を行った。地域交流会は紋別市のサッカー協会と連携し少年団等に呼びかけ、参加を募った。本校同好会の生徒(15名)と小学生(11名)がフットサルを通して交流を行った。

後日、紋別サッカー協会や紋別市教育委員会と連絡を取り、今後も各関係機関が連携して取り組むことを確認した。地域にひらかれた学校を目指す本校にとって、今回の取り組みは大変有意義なものになったと考える。

2 実践研究の今後の課題

(1) 外部指導者の活用について

外部指導者の活用に関しては小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会の指導員派遣事業の活用のみとなってしまったことから、来年度は紋別市と連携することやその他の地域の外部指導者を依頼していくなど、積極的に外部指導者の活用を計画していきたい。今年度、外部指導者の相談を行った旭川のフットサルクラブと来年度は実現できるよう計画していくという確認をしている。

(2) 部活動としてフットサル部の設立

今年度、フットサル同好会という形で試験的に活動し、本校生徒の興味や関心の実態を把握することができた。来年度は部活動として本格的に指導し、フットサル指導の改善や工夫を行っていきたい。

(3) 地域のフットサル大会への参加

紋別市では2018年2月に第1回となるフットサル市民大会が計画されており、本校は一般の部で参加を予定している。地元の大会に積極的に参加することで地域の方々とフットサルを通して交流することができ、生徒自身が地域で生活する喜びや楽しさを実感することができると思う。第1回小野寺眞悟杯で得た経験を地域でも活かせるよう指導していきたい。

I 研究テーマ設定の理由

現状の中札内高等養護学校での指導メニューや方法から、生徒の技術の向上や生徒の変容を発表することで、ねらいを明確にし、本校の実践を客観的に判断するためにテーマを設定した。特に、少人数の中、限られた時間の中での活動なので、本校生徒のストロングポイントを見極めた上で、メニューをつくり、今後の大会や練習試合で確認する必要がある、研究をすることでより質の高い指導を行うことができると考える。また、十勝管内での交流・実践を発表することで他地域でも実践できるようであれば、参考にしていただきたく思い、実践の発表を行う。

実際の練習の中で、ウォーミングアップ、1対1、ゲームに使える動き方の3点に課題を感じていた。そこでこの機会の研究することとした。

II 学校の実態

北海道中札内高等養護学校は開校し 35 年が経ちサッカー部ができて7年である。全生徒116名おり、そのうち9名がサッカー部に所属している。

本校サッカー部の生徒はほとんどが未経験者であり、練習の中で、基礎的・基本的なところから取り組んでいる。また、運動が好きな生徒が多いが、中学校時に部活動の経験がある生徒は少ない。

週1回～3回程度、活動している。また、人数が少ないので、ゲーム形式の練習を行うことが難しい部分がある。

大会参加については、積極的に参加したいと考えてはいるものの、保護者の負担が大きくなるため、今年度は、7月に高等養護学校サッカー大会、小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会、1月のチャレンジドフットサル大

会、3月の中札内村フットサル大会の参加を考えている。また、保護者の送迎が可能で、協力が得られる場合は、サッカーフェスティバルやトレセンなどに参加している。

中高養サッカー部のスタイル

- あきらめない。
- 気持ちを前面に出して戦う。

技術的なことよりも、気持ちの部分を中心にし、指導をしている。

III 実践研究の内容・方法

1 ウォーミングアップ

(1) 課題点

ウォーミングアップをする際に、今までは、ランニング→体操という流れで行うことが多くあった。また、ラダーなどのトレーニングを入れながら取り組んできた。時間のない中で、考えていくうちに、ボールを使いながらのトレーニングと平行して、ストレッチを行うことが今の本校には合っているのではないかと考え、次のようなウォーミングアップに取り組んだ。夏場までは、サッカーの練習をしており、スペースへのトラップ、コントロールを指導しており、生徒たちの中で、フットサルだからといい、切り替えが難しい面がある。足の裏の使い方を体に染みこませるため、ドリブルをしながら体を温めるようにした。

ボールを使いながら、体を温めるアップに取り組む。10～15分間程度行う。

- ・サイズ 20m×20m (生徒の人数による)
- ・カラーマーカー 20枚程度、4色程度
- ・ボール 一人一個

(2) ポイント

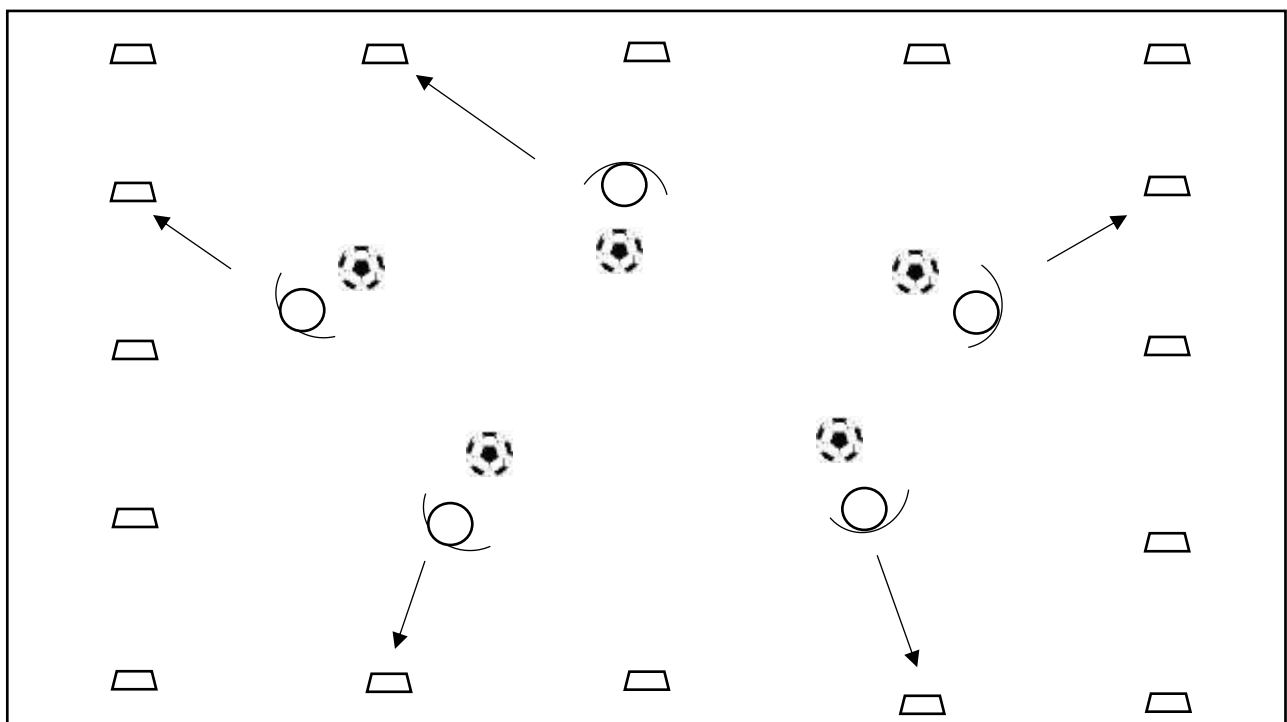
- ①ボールをたくさん触る。いろいろな部位・ド

リブルを行う。

- ②笛が鳴ったときにスピードの変化をつけ、マーカーでちゃんとボールを止める。
 - ③顔を上げてドリブルをし、どこに何色のマーカーがあるのか事前に把握できるようにする。
- ※生徒の技術面を考慮し、ポイントすべてではなく、絞って取り組む。

(3) 内容

- ①フリードリブル→笛&色の指定→指定された色のところに行き、ボールを止める→笛→フリードリブルを繰り返しながら、体を温めてから、ストレッチを行う。



- ②ボールを止める→ストレッチ→フリードリブルを繰り返す。

- ③マーカーでボールを止めるだけではなく二人組や三人組を作るなど、生徒の動きに変化を持たせる。

- ①②③の方法は組み合わせながら行う。

ウォーミングアップと共に、ボールを扱う感覚を身につけることも一緒に目指していく。

生徒の技術によっては、ドリブルを“右足のみ”、“足の裏を使って”、変化や負荷を加えながら行う。

マーカーではなく、コーンや人(教師や生徒など)でもよい。

(4) 実践研究

ア 練習の様子

実際に取り組む中で、まずはボールを自分の思い通りのところに置き、ドリブルをしたり、マーカーのところでうまくボールを止めることができないということが多くあった。また、フットサルのスペースを意識せず、サッカーの感覚でボールをコントロールする生徒もいた。生徒同士でぶつかったり、ボールがコントロールできずにぶつかることもあった。サッカーとフットサルの違いを伝え、自分の近くでコントロールすることを指導した。また、重心が高い生徒が多く、重心を落とすことも取り組む中で指導を重ねた。

(図1 ウォーミングアップ)

イ 成果

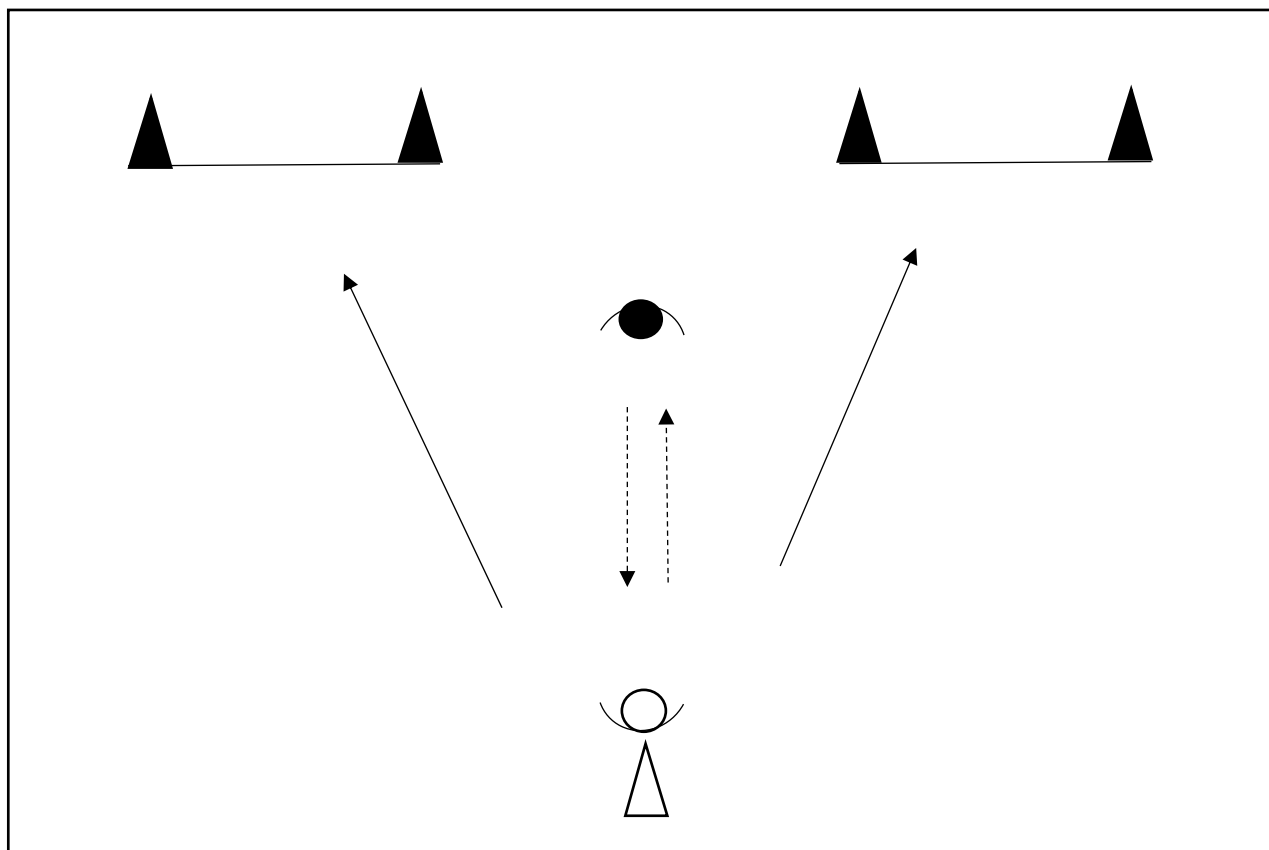
何度か取り組むうちに、足の裏の感覚が身につき、余裕が生まれると判断が早くなった。相手、他のボールを見ながら、フリードリブルができるようになった。ボールを止めるときに、うまく止められなかった生徒も足の裏で止められることで、パス練習や試合中にボールを止めることができるようになった。

2 1対1①

(1) 内容

1対1の場面で、どのような攻め、守りをするのか理解する。10～15分間程度行う。

運動量が必要なため、体力の向上やゲーム体力をつけることも狙う。



- ・サイズ ハーフコート（生徒の人数や練習メニューに合わせて）
- ・ボール 数個
- ・コーン 5個

- ①攻めと守りでパス交換をしてからスタート。
- ②ボールをサイドラインから入れて、実践に近形で行う。

攻守のポイントが理解・実践できるようになってから②に進む。

生徒をグルーピングし、①と②に分けて取り組む。

（２）攻めのポイント

- ①最短距離で、ボールに向かう。
- ②スピードの変化をつけて仕掛ける。
- ③いろいろなドリブルにチャレンジする。

（３）守りのポイント

- ①相手に対して体を当てる。
- ②相手に正対しない。
- ③ボールが取れなかったときの優先順位を考える。抜かれない間合いをとる。

（図２ １対１①）

（４）実践研究

最初のステップとして、ボールを使わずに行った。

体を上手に動かし、スピードの変化や止まるなど、相手をかかわそうと工夫が見られた。捕まえる役の生徒も相手の状態に合わせながら、タッチすることができた。

ア 攻めの指導・成果・課題

ボールを使っでの１対１①を行うと動きが全然変わった。攻め側は、ボールのコントロールをすることに意識が向き、ボールが無い場合の動きができなくなってしまった。ボールコントロールが上手な生徒も相手の動きに合わせてしまうことが多かった。本校の生徒の実態を考えると、タッチ数を少なくすることで指導した。攻め側は、スピードを落とさないことを指導した。

抜くことを考えるとスピードが落ちたり、タッチ数が多くなってしまう。それにより、ボールコントロールがうまくいかず、終わってしまうこともあったが、思いきりの良さやスピードを生か

した

ドリブルが見られた。生徒自身で相手を抜くためには、どうしたらよいか考えることで、止まるフェイントを入れたり、股を狙ったりと、チャレンジする様子が見られた。

イ 守りの指導・成果・課題

守る側の生徒は、ボールを意識するのか、正対して対応することが多く見られた。守り側は、半身になり体をぶつけることを指導した。体をぶつけること教えるために、個別に教師と一緒に体の当て方を確認しながら進めた。最初はうまくできないことがあったが、回数を重ねるうちにできるようになり、試合に生かせるようになった。それにより、立ち方・ステップワーク、距離感を理解し、実践することができた。また、重心の置き方やかかとをつけないなどできそうな生徒には、体の使い方などを指導した。

まだ相手に飛び込んでしまうことが多く、簡単に抜かれてしまうことがあり課題である。回数を重ねる中で、疲れてくると追わなかったり、あきらめてしまうこともあり、まだまだ練習が必要である。

一方のサイドを切る、ライン際に追い込んでいくという点が理解に時間がかかっており、身につけていない。この部分を今後理解させていきたい。

ウ 練習を進める中での成果・課題



(写真1 ボールを使わない1対1①)

2グループに分けて、休む時間を減らした。取り組む回数、走ることが多くなるので、短い距離ではあるが、ボディーコンタクト、スピードの

変化があり、体力的なトレーニングにもなった。課題として、自分たちのストロングポイントである粘り強く、あきらめないというポイントをもっと植え付け、相手にいやがられるディフェンスの徹底を図りたい。



(写真2 ボールを使っの1対1①)

3 1対1②

(1) 内容

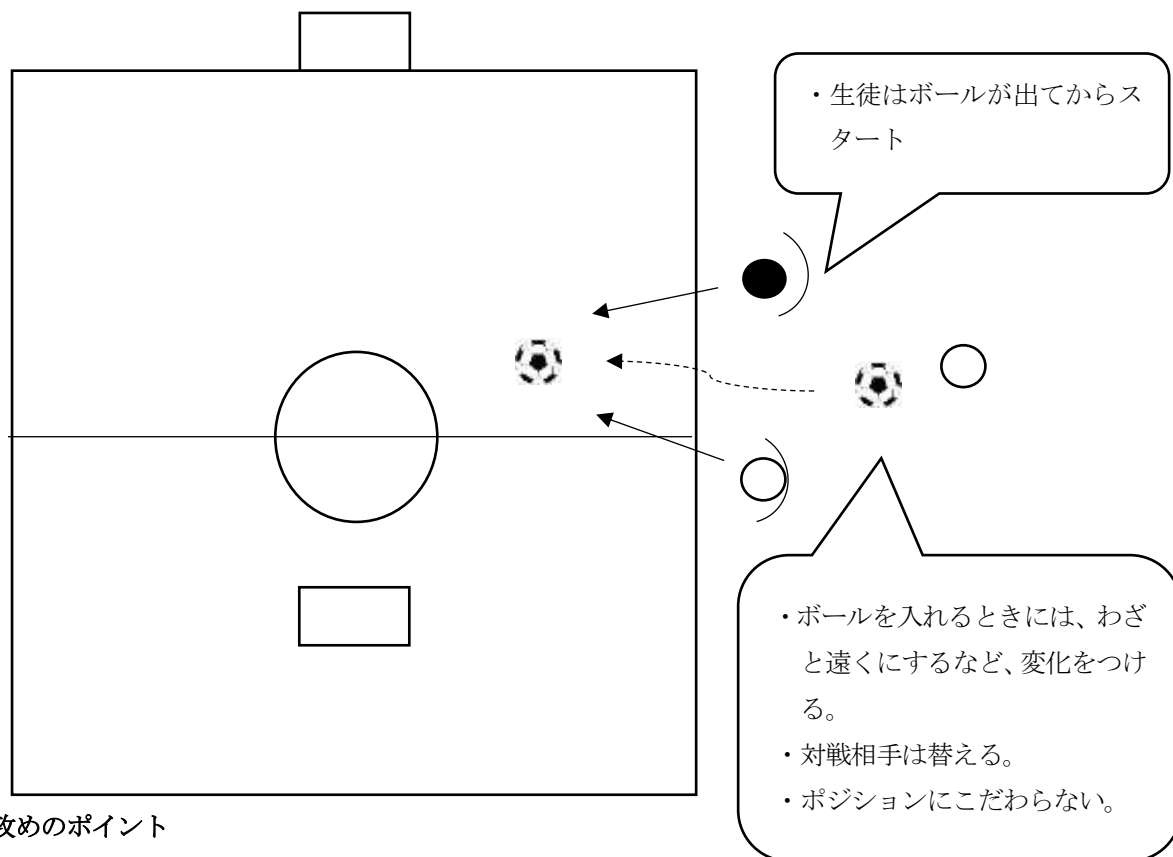
- ・サイズ ハーフもしくは3/4コート
(生徒の人数や練習メニューに合わせて)
- ・ボール 数個

- ①横からボールを入れて、同時に追いかけて、1対1に入る。
- ②ゴールにシュートを打つか、コート外にボールが出るまで行う。

攻守のポイントを明確に行うことを意識し、コートが広がるので、早めにあきらめたりする場合があるが、そこが練習のポイントであることを生徒と共有し、取り組む。このような状況の中で、運動量をあげることや体力の向上もねらいの一つである。

抜かないとシュートを打ってはいけない、入らないなら打ってはいけないという思いがある。シュートを打つことを意識付けさせる。

周りからの「ガンバ〜」等の言葉をだし、チームで苦しい練習に取り組むことで、連帯感を出せるようにする。



(2) 攻めのポイント

- ①最短距離で、ボールに向かう。
- ②ゴールが見えたらシュートを打つ。

(図3 1対1②)

(3) 守りのポイント

- ①相手に対して体を当てる。足を出す。
- ②ボールが取れなかった時の優先順位
振り向かせない→抜かれない間合いをとる

ボールが転がったときの反応もよくなった。攻守の切り替えについても意識することができるようになり、シュートチャンスが増え、ゲーム中のボールへの反応が早くなってきた。

(4) 実践研究

ア 攻めの指導・成果・課題

実際にゴールを置くことで、競争意識が芽生え、ハードなトレーニングを行うことができた。始めは、シュートを迷うこと、相手が前にいるとシュートを打たないことがあった。相手がいても、シュートを打たないと点が入らないこと、シュートを打つことで相手にとっても脅威になることを何度か説明した。練習を重ねる中で、シュート

イ 守りの指導・成果・課題

1対1①から入ったことにより、相手との距離感はうまく取れるようになった。1対1の練習をしていく中で、“戦う気持ち、負けたくない”という気持ちが出てくるようになり、体を当てたり、シュートブロックに飛び込めるようになった。シュートをブロックされた後、相手の体に当たり

ウ 練習を進める中での成果・課題

競争意識・体力面で大きな成果があった。攻守の切り替え、ボールへの反応も良くなった。ボールをとる前に体をぶつけるというところまで指導できなかったところが今後の課題である。



(写真3 1対1② スタート)

課題として、当初は、声かけをしながら取り組む計画であったが、人数が少ないこと、ボールを取りに行くなど声を出す時間が無く、連帯感を育むところまでは到達することができなかった。

先生方と練習するときに、消極的になってしまいうことが見られた。チャレンジする気持ちも出てくるとよりレベルの高い練習ができるように感じた。



(写真4 1対1② ボールへの反応)

4 フリーズゲーム→ゲーム

(1) 内容

試合での動き方やポジショニングを理解させる必要がある。生徒の特性等を考えると、実際の場面で取り組むことが必要と考えた。その場の判断が苦手で、フォーメーション練習を行い、試合に生かすことが難しい。ゲーム形式の中でフリーズさせ、考えさせたり、判断させるようにし、動き方を覚えさせる。

確認する点は、次の点であり、攻撃面よりも守備面を重点に指導する。

(2) 攻撃面のポイント

- ①ボールをもらえるポジションはどこか。
- ②より点が入る、攻めることができるスペースはどこか。

(3) 守備面のポイント

- ①ポジショニングが適切か。
(どこにポジションをとるか。ボールとゴールの間にポジションをとっているのか。)
- ②ボールに対して、どう寄せているか。
(ボールを取ろうとしているのか。)

(4) 実践研究

ア 練習を通しての成果

試合の中で動き方を確認することで、生徒達の理解が深まった。フリーズさせることで、生徒に問いかけたりすることで、反復し定着ができた。

イ 攻撃面での指導・成果・課題

ボールのもらい方が上手になった。特に、キックインからのもらい方を覚えることができた。以前は、ポジションに入って止まってしまうことが多かった。自分がほしいところを空けたり、動きながらもらうことができなかった。練習を重ねることで、動きながらもらうことが次の攻撃をしやすいこと、自分たちの持ち味を出せることを少しずつ理解することができた。フリーズゲームからゲームに入るとねらい通りのプレーが何回か見られるようになった。1対



(写真5 フリーズゲーム)

1の練習からシュートへの意識がでてきた。

課題として、スペースが空いているので、足下にパスをしてしまうことがある。また、スピードに乗ったときのボールコントロールが難しい。この点が改善されるとよりシュートチャンスが生まれる。

ウ 守備面での成果・課題

守備面では、ポジショニングが大きく改善されたゴールとの間にポジションが取れるようになった。チームの決まり事として、相手コートからキープスローやキックインのときには、一度自コートに戻るようにした。自分のマークの確認ができるようになった。1対1の練習をしているので、相手に厳しくいけるようになった。

守備面での課題として、疲れていると、ポジショニングが甘くなる、抜かれると追えないなど体力的な課題が見られる。前線からのプレスができれば、よりチャンスが多くなることが考えられるが、現状では前線からのプレスをかけると、ピンチになり、体力的にもきつく難しいと判断した。

5 練習試合、技術員派遣事業

11月19日（日）に中札内高等養護学校体育館にて、中札内高等養護学校幕別分校サッカー部、新得高等支援学校サッカー部、本校サッカー部の3校で、技術員からの指導・練習試合を行った。本校から7名、幕別分校9名、新得から4名の参加となった。

練習試合は以前から計画しており、3校で練習試合をする予定であった。集まる機会があまりないので、せっかくの機会ということで、練習試合だけではなく、技術員から指導していただくことにより、スキルアップの機会とした。

(1) 内容

①集合・本日の流れ・技術員紹介

②ウォーミングアップ

・鬼ごっこ→ボールを使つての追いかっけこ

③パス練習

・4人一組（パス&ゴー）

④シュート練習

⑤ゲーム

・学校対抗

・生徒A B C Dチーム

vs 技術員+教員チーム

(2) 実践研究

ア ウォーミングアップの成果

ウォーミングアップとして、鬼ごっこを行った。

ボールを持っている人には、タッチしてよいというルールของときには、タッチされたくないために相手を早く見つけ、ボールを渡そうとする意識を持って行うことができた。試合につながるような動きや声をだすことがみられた。体を温めること、動きがわかるため、とてもよいウォーミングアップになった。

イ パス練習の成果

パス練習では、足の裏を使い、ボールをコントロールすることを指導していただいた。生徒たちはしっかり話を聞き、意識高く練習に取り組むことができた。3種類の練習を行い、少しずつレベルアップしていただいたおかげで、スムーズに練習に参加でき、意欲的に参加することができた。

ウ シュート練習の成果

シュート練習では、フットサルが一番点数が入りやすい形を教えていただき、動きの確認をした。ゴールに詰めるという動きは、初めてであった。

難しい動きであったが、動きを理解すると、シュートとパスの選択肢を持つことができ、チャンスを広げられる練習となった。

エ ゲーム

① 学校対抗

3校総当たりで行った。練習試合と言うこともあり、集中して、真剣に取り組むことができた。普段チーム内でのゲームに比べると、良い動きをしていた。気持ちが入っており、必死な様子を見ることができた。

② 生徒 VS 技術員+教員チーム

生徒をレベル別に分け、A B C Dの4つのチームに分けた。同じような技術を持った生徒でチームを作ることにより良い刺激になった。

Aチームはコミュニケーションをとりなが

ら、技術員＋教員チームに向かうことができた。普段チームのレベルに合わせている生徒もおり、高いレベルで試合ができてよかった。本校A君は、「このチームでできて楽しかった。」と感想を持った。

Bチームは和やかな雰囲気に取り組むことができた。急造チームではあったが、随所に良いプレーが出ていた。本校生徒B君は内向的な生徒だが、声を出してプレーすることができた。

Cチームはなかなかコミュニケーションを取ることは難しかったが、攻めるときには、勢いよく攻めることができた。もう少しで点が入るところまで持って行くことができた。「シュート決めたかった」と生徒が悔しがっていたのが印象的であった。

Dチームは良い表情でゲームに臨み、楽しそうに行っていた。シュートが決まったときに、とても喜んでいて。「やったー」と大きな声で、チームで喜んでいる様子が見られ、雰囲気がとてもよかった。

③ 全体を通しての成果

グルーピングをしたことで、初めは生徒同士に堅さが見られたが、ゲームを重ねる中で、良いプレーが多く見られるようになった。

ミスしたときにも、「ごめん」と言い合ったり、「おいしい」という言葉掛けがでるなど、予想していたよりも打ち解けて取り組むことができた。

生徒同士の交流が図られ、「またやりたい」という気持ちが持てる、良い機会となった。

IV 実践研究の成果と今後の課題

1 実践研究の成果

今回の実践研究を通して、生徒たちの技術の向上が図られ、技術の変容が見て取れた。また、生徒たちのフットサルに対する理解が深まった。

「こうやるとうまくいく」「こう動けばチャンスになる」などフットサルに対する考え方、頭の使い方が身についてきた。

生徒たちに練習の意図やなぜこれらの練習を行うのか、明確に提示し、進めることができたことで、動機付けがなされ、見通しを持つことができた。

別の視点での成果として、保護者や周りの人々

への感謝という点でも、生徒に指導することができた。大会参加や送迎、お金の部分などでいろいろな人々が関わり、自分たちの活動が成り立っていることをより理解する機会となった。

教員間の成果として、本校サッカー部のストロングポイントや課題などを話し合い、共有し、必要な練習内容や練習量を確認することができた。指導をする教員が毎回固定ではなく、差が出てしまうことがあったが、より指導のポイントを絞り、徹底した指導を行うことができた。

時間が限られた中での指導のため、“練習の質”が問われる。この度の研究を行うことにより、“練習の質”を見直し、“練習の質”に着目することができた。

地域という視点での成果は、十勝圏にある3校の高等養護学校がフットサルを通して交流を図ることができたことである。生徒たちにとっても同じ十勝で頑張っている生徒同士で練習をしたり、ゲームができることは大きな刺激となった。自分たちだけでは、モチベーションを維持することが難しいため、今回の技術員派遣は、大きな成果に繋がった。

また、3校は生徒間、学校行事等の交流というのは残念ながらできていないのが現状である。そのような状況の中で、フットサルを通して交流できた意義はとても大きいと考える。

2 実践研究の継続したいこと・課題

今回の研究では、「高等養護学校のフットサル指導における実践と工夫」というテーマで取り組み、来年度以降も続けたいことが2点あり、1点目は、1対1をあきらめずに、体をぶつけて、戦う気持ちを出すことである。2点目は、十勝圏3校での交流・練習試合を行いたいと考える。

1点目は、部活動・サッカー・フットサル経験がない生徒が多い中で、優先して身につけなければいけないことは、技術よりも気持ちの部分と考える。卒業後も続けるという生徒は限られているが、3年間の部活動で身につけた気持ちの強さや頑張る姿勢などは、将来の生活で役に立つと考えるためである。

2点目は、自校だけでの指導では成果・成長が限定されてしまうと考える。似たような環境の生徒同士がフットサルを通して、切磋琢磨する機会

を持ちたい。交流初回であるが、各校成果を感じることができたので、継続したいと考えている。

課題として、生徒の積極性・主体性という点である。

練習中に元気がないというのが本校の大きな課題と感じた。きつい練習のときに生徒同士で励まし合う、競争できるような練習の組み立て、指導をしていけるように考えていきたい。“練習をさせられている”と生徒達が感じてしまう内容で

はなく、“こういう練習がしたい”と前向きに考えられる内容・指導方法にしていきたいと考える。

今回の研究を通して得ることができた成果を今後の活動に生かしていきたい。より技術面での成長や生徒間の交流を図りたいと考える。

課題については、顧問間で考えていながら解決できるようにしていきたい。目標やねらいを明確にし、指導に当たりたい。



(写真6 練習試合 写真①)



(写真7 練習試合 写真②)

平成 29 年度 フットサル指導員派遣巡回指導報告

社会福祉法人明日佳 職員 吉 田 順 省

1 巡回指導の日程

派遣指導日	派遣指導校	指導員
平成 29 年 9 月 11 日 (月)	北海道今金高等養護学校	吉田順省、市場大資
平成 29 年 10 月 28 日 (土)	北海道札幌稲穂高等支援学校	吉田順省、市場大資
平成 29 年 11 月 7 日 (火)	北海道紋別高等養護学校	吉田順省、笠間慎也
平成 29 年 11 月 19 日 (日)	北海道中札内高等養護学校、 北海道中札内高等養護学校幕別分校 北海道新得高等支援学校	吉田順省、市場大資
平成 29 年 11 月 21 日 (火)	北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校	吉田順省、市場大資
平成 29 年 12 月 6 日 (水)	北海道稚内養護学校	吉田順省、市場大資 笠間慎也

2 具体的な指導内容等

(1) 北海道今金高等養護学校

- 報告者 吉田順省
- 報告期日 平成 29 年 9 月 15 日
- 実施校 北海道今金高等養護学校
- 巡回指導者 吉田順省、市場大資
- 当該校担当教諭 海田健教諭
- 実施日 平成 29 年 9 月 11 日 (月)
- 実施日程 ①13:00～14:40 1 年生 (生徒数 23 名) 体育授業
②15:30～17:00 サッカー部 (1.2 年生 16 名) 部活動

○実施概要

- ・1 年生の体育授業

生徒は、コミュニケーションが取りやすく明るい生徒さんでスムーズな進行、フットサル授業が出来ました。

実施内容としましては、フットサルの基礎となるドリブルを中心として、グループでのゲーム形式の内容を取り入れて、仲間と協力して何かを実現させる、成功させる、仲間を応援するなど「チームワーク」、そして仲間とともにスポーツを行う「楽しさ」というテーマをフットサルを通じて伝える為に授業を実施させて頂きました。

生徒の皆さん、とても明るく積極的に授業を受けて頂き、笑顔溢れる楽しい授業になったと感じております。



・サッカー部の部活動指導

3年生が実習期間であったので、1,2年生16名での部活動となりました。

この時間はフットサルに必要である「足の裏を使ったプレー」、「トゥーキック」など技術的な指導をさせて頂きました。授業とは違い、生徒の皆さんは真剣にプレーして下さり、2年生はレベルの高い方が多く最後のゲームでは好プレーがたくさん見られました。



○自己評価及び今後の課題等

今回の巡回指導は、体育授業、部活動の2回の指導を行い、2回とも明るく楽しいフットサル授業が行えたと感じております。

フットサルに限らず、スポーツを行う事で今後「心と体の健康」が大切になると伝えさせて頂きました。

高校を卒業して社会に出るといろいろなことがある中、運動・スポーツを行う事で健康的で精神的にも強く生きていけると私は強く感じているので、授業、部活動の両時間の最後に、このことについて強調してお話させて頂きました。

今金高等養護学校の生徒が、今後、スポーツを続けて行ってくれたらと願っております。

また、校長先生をはじめ、担当の海田教諭、またこの日は道南の特別支援学校教頭会研究協議会を実施しており、関係者がたくさん方が見学に来られて、お褒めのお言葉を掛けて頂き、感謝の気持ちで一杯です。

当財団の最初の活動として良いスタートが出来たのではないかと感じております。私は、これに慢心することなく、道内の支援学校の生徒さん、親御さん、先生の皆さんにフットサルを通じて楽しく、今後に繋がる時間を過ごして頂けるよう、「小野寺眞悟財団」の指導担当者として、活動してまいりますので今後もよろしくお願い致します。

(2) 北海道札幌稲穂高等支援学校

○報告者 吉田順省

○報告期日 平成29年11月6日

○実施校 北海道札幌稲穂高等支援学校

○巡回指導者 吉田順省、市場大資

○当該校担当教諭 門間大樹教諭

○実施日 平成29年10月28日(土)

○実施日程 10:00~12:00 サッカー部(1,2,3年生0.B 19名)部活動

○実施概要

生徒は、コミュニケーションが取りやすく明るい生徒さんでスムーズな進行でフットサル指導が出来ました。

実施内容としましては、部活動でサッカーをやられている生徒さんやサッカー部の0.Bがいましたが、フットサルに興味を持たれている初心者の方もいましたのでフットサルの特徴を織り交ぜた基礎となる

ドリブル、パス、シュートとシンプルなセクションで楽しくゲーム性のあるものを行いました。最後には試合を行い、皆さんから笑顔が溢れて楽しい雰囲気の中フットサル指導を行うことが出来ました。最後には仲間と協力して何かを実現させる、成功させる、仲間を応援するなど「チームワーク」、そスポーツを行う「楽しさ」、また今後の人生において余暇活動の一環としてフットサルをはじめ、スポーツを取り組んでもらい「心と体の健康」というテーマを今回のフットサル指導を通じて伝える為に巡回指導を実施させて頂きました。

生徒の皆さん、とても明るく積極的に、またお話を聞く態度がしっかりしており有意義なフットサル授業を実施することが出来たと感じております。



○自己評価及び今後の課題等

今回の巡回指導では、サッカー部、O.B.、そして初心者と様々な方とのフットサル指導となりましたが、参加された皆さんからも笑顔が見られて明るく楽しいフットサル指導が行えたと感じております。

前回同様にフットサルに限らず、スポーツを行う事で今後「心と体の健康」が大切になると伝えさせて頂きました。

高校を卒業して社会に出るといろいろなことがある中、運動・スポーツを行う事で健康的で精神的にも強く生きていけると私は強く感じているので、今回も指導の最後に、このことについて強調してお話させて頂きました。

稲穂高等支援学校の生徒さん、O.B.の皆さんが今後、スポーツを続けて行ってくれたらと願っております。

また、明日佳近隣の学校ということもあり、実習生の受け入れも多い学校でもあるので生徒さんはじめ、顧問の先生の皆さまともフットサル以外のお仕事の面のお話も出来ました。

アスカラダのことも知られている方もおられたので、当財団活動と同時に施設でのフットサル活動にも力を入れていき、「仕事とフットサルの両立」ということも売りになる施設になる為の魅力的な存在になればと感じました。今後の活動の仕方なども少しずつ考えていかなければと感じております。

当財団の2回目の活動となりました。大きな怪我もなく楽しい雰囲気の中でフットサル指導が行えたと感じておりますが、これに慢心することなく、道内の支援学校の生徒さん、親御さん、先生の皆さんにフットサルを通じて楽しく、今後に繋がる時間を過ごして頂けるよう、「小野寺眞悟財団」の指導担当者として、活動してまいりますので今後もよろしくお願い致します。

(3) 北海道紋別高等養護学校

- 報告者 吉田順省
- 報告期日 平成 29 年 11 月 13 日
- 実施校 北海道紋別高等余語養護学校
- 巡回指導者 吉田順省、笠間慎也
- 当該校担当教諭 三木進教諭
- 実施日 平成 29 年 11 月 7 日 (火)
- 実施日程
 - ①13:30～15:15 2.3 年生 (生徒数 72 名) 体育授業
 - ②15:40～17:20 ・紋別高等養護学校フットサル同好会 (1～3 年生 32 名)
 - ・紋別市内のサッカー少年団 14 名

○実施概要

・2.3年生の体育授業

今回は人数が多く、体育館ということもあり一人ひとりがボールを触ることが難しい状況でしたので、クラス対抗のグループで行うメニューを実施させて頂きました。

実施内容は、まず初めにフットサルに関する簡単な講義をさせて頂きその後、フットサルの基礎となるドリブルのメニューでフットサルの特徴を取り入れたものでクラス対抗のゲーム形式の内容を行い、最後には各クラスから代表者を募り、財団職員と教師チームの混合チームで試合を実施しました。仲間と協力して目標に向かい挑戦する、成功させる、仲間を応援するなど「チームワーク」、そして仲間とともにスポーツを行う「楽しさ」というテーマをフットサルを通じて感じてもらえるように授業を実施させて頂きました。

生徒の皆さんはとても明るく積極的に授業を受けて頂き、笑顔溢れる楽しい授業になったと感じております。



・フットサル交流会

7月のフットサル大会にも参加して頂いたフットサル同好会の生徒さんと今回は紋別市内のサッカー少年団の子供たちとの交流も兼ねたフットサルクリニックを開催させて頂きました。

最初に前の時間同様にフットサルに関しての講義をさせて頂いた後に、紋別高等養護学校様から事前に「地域との交流」ということがありましたので生徒さんと子供たちが触れ合える内容を実施させて頂きました。生徒と子供が二人一組になってお互いに協力する、相手への思いやりを大切にし、フットサルの特徴でもある足の裏を使ったドリブルを中心としたメニューを行いました。最後には前の時間と同様に試合を実施し、生徒の皆さん、少年団のお子さんと楽しくフットサルすることが出来ました。



○自己評価及び今後の課題等

今回の巡回指導は、体育授業、交流会と2回の指導を行い、2回とも明るく楽しいフットサル授業が行えたと感じております。しかし、今回は予定時間を超えてしまい、ご迷惑をお掛けしました。私の進行において時間調整の面では反省しなければいけないことであります。

今回は他の巡回時同様にフットサルに限らず、スポーツを行う事で今後「心と体の健康」が大切なことと、「人との繋がり」についても伝えさせて頂きました。

高校を卒業して社会に出ると一人では生きていけないので、仕事においても私生活においても「人との繋がり」が大切になると私は思っています。今回の巡回指導でも「協力する」、「応援する」などといったことを織り交ぜたメニューを行わせて頂き、交流会では年齢が離れた人との関わる会となりました。フットサルを行う中で障がいがあるない、年齢、男女など関係ありません。プレーする全員が楽しめるスポーツ、また人間としても成長させてくれるスポーツだと私は強く感じております。運動・スポーツを行う事で健康的で精神的にも強くなり、人間としても成長していけると生徒さん、少年団の皆様にお話しさせて頂きましたので、皆様の今後にお役に立てればと思います。

校長先生をはじめ、教頭先生、担当の三木経論、たくさんの先生の皆様にご協力頂き、大きな怪我もなく終わることが出来ました。また、来年も是非お願いしたいなどお褒めのお言葉を掛けて頂き、感謝の気持ちで一杯です。

当財団の活動において、私たちにしか出来ない活動であると思っております。道内の支援学校の生徒さん、親御さん、先生の皆さんの少しでも今後のお役に立てるよう、また、今後に繋がる時間を過ぎて頂けるよう、慢心することなく「小野寺眞悟財団」の指導担当者として、活動してまいりますので今後よろしくお願い致します。

(4) 北海道中札内高等養護学校・北海道新得高等支援学校・北海道中札内高等養護学校幕別分校

- 報告者 吉田順省
- 報告期日 平成29年11月6日
- 実施校 北海道中札内高等養護学校、北海道中札内高等養護学校幕別分校
北海道新得高等支援学校
- 巡回指導者 吉田順省、市場大資
- 当該校担当教諭 濱谷良介教諭
- 実施日 平成29年11月19日（日）
- 実施日程 13:00～16:00 フットサル合同交流大会（23名）
- 実施概要

今回は中札内、幕別分校、新得の3校が合同でフットサル交流会として開催して頂きました。生徒さんは、コミュニケーションが取りやすく明るい生徒さんでスムーズな進行でフットサル指導、交流戦が出来ました。

まず、最初の1時間はフットサルクリニックを実施させて頂きました。実施内容としましては担当の先

生から少し難しい内容でとの依頼がありましたので、コントロールやシュートなど専門的で次の交流戦に繋がるような内容で部行わせて頂きました。

交流戦は各校に分かれての試合で人数が足りない学校には私たちが入る形で行い、その後は大人対生徒という生徒も各校の生徒をシャッフルしてエキシビジョンマッチとしてゲームを行いました。先生の皆さまもサッカー経験者が多く、明るい雰囲気の中、フットサルを行うことが出来たと感じております。

最後には今回の活動を通じて生徒の皆さんにお話しさせて頂いていることで仲間と協力して何かを実現させる、成功させる、仲間を応援するなど「チームワーク」、そスポーツを行う「楽しさ」、また今後の人生において余暇活動の一環としてフットサルをはじめ、スポーツを取り組んでもらい「心と体の健康」というテーマをフットサルを通じて学んで頂けたらとお話しさせて頂きました。



○自己評価及び今後の課題等

今回の巡回指導では、フットサルの専門的な内容を実施させて頂きましたが、少し難しい内容で生徒の皆さんを少し混乱させてしまったと感じております。しかし、生徒の皆さんは楽しそうにフットサルクリニックに参加して頂き、試合も明るい雰囲気の中、行うことが出来ました。先生の皆さまにもご協力頂き、大きな怪我もなく無事終了することが出来ました。

また、この活動を通じて皆さまにお伝えさせて頂いているフットサルに限らず、スポーツを行う事で今後「心と体の健康」が大切になると伝えさせて頂きました。

高校を卒業して社会に出るといろいろなことがある中、運動・スポーツを行う事で健康的で精神的にも強く生きていけると私は強く感じているので、今回も指導の最後に、このことについて強調してお話させて頂きました。

今回も大きな怪我もなく楽しい雰囲気の中でフットサル指導が行えたと感じておりますが、たくさんの先生の皆さんのご協力があり成功しているとも強く感じ、自分自身も成長させて頂いています。これに慢心することなく、道内の支援学校の生徒さん、親御さん、先生の皆さんにフットサルを通じて楽しく、今後に繋がる時間を過ごして頂けるよう、「小野寺眞悟財団」の指導担当者として、活動してまいりますので今後もよろしくお願い致します。

(5) 北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校

- 報告者 吉田順省
- 報告期日 平成 29 年 11 月 22 日
- 実施校 北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校
- 巡回指導者 吉田順省、市場大資
- 当該校担当教諭 佐々木大介教諭
- 実施日 平成 29 年 11 月 21 日（火）
- 実施日程 13：20～14：45 マイタイム授業（高等部 13 名、小学部 6 名）
- 実施概要

今回の巡回指導は高等部、小学部の生徒さん合同で 2 グループに分かれての授業となりました。

A グループは吉田がメインで高等部 6 名、小学部 6 名、計 12 名の生徒さんとドリブル、シュートを中心にゲーム性の高い内容のフットサルクリニックを行いました。生徒の皆さんはとても明るく元気にフットサルを行ってくれており、私も楽しくやらせて頂きました。また、先生の皆様にもフォローして

頂き、クリニックを行う事が出来ました。

Bグループは先生がメインで市場がサポートとして入り、高等部7名の生徒さんがシュートゲームなどのゲーム形式の内容でフットサルを行いました。終始笑顔が多く、楽しい雰囲気の中、フットサルが出来ました。

最後に試合を行い、チームも高等部、小学部、合同チームと行いました。試合も皆さん明るく取り組んでくれており、大きなケガもなく楽しい時間を過ごすことが出来ました。

今回の巡回授業では仲間と仲良く楽しくスポーツを行い「心と体の健康」というお話をさせて頂きました。これからもフットサルをはじめ、何かしらの運動やスポーツに取り組んで頂けたらと思います。



○自己評価及び今後の課題等

今回の巡回指導でも生徒さんが楽しんでフットサルを行って頂き、私たちも楽しくフットサルすることが出来ました。今回も仲間とスポーツを行う「楽しさ」、スポーツを行うことで「心と体の健康」が維持、増進され楽しい学校生活、私生活を送ることが出来るという内容のお話をさせて頂きました。また、今まで巡回した学校よりも障がいの状態などで困難さを抱えた生徒さんもいたので、たくさんの先生の皆様のサポートを頂き、無事に終えることが出来たと感じております。支援員としても勉強になる面があり、良い時間を過ごさせて頂いたことに感謝致しております。フットサル後には生徒さんをお話する時間もあり、下校も見送りさせて頂きました。楽しく、明るい雰囲気の中、有意義な時間を過ごすことが出来ました。

大きな怪我もなく楽しい雰囲気の中でフットサル指導が行えたと感じておりますが、これに慢心することなく、道内の支援学校の生徒さん、親御さん、先生の皆さんにフットサルを通じて楽しく、今後に関わる時間を過ごして頂けるよう、「小野寺眞悟財団」の指導担当者として、活動してまいりますので今後もよろしくお願い致します。



(6) 北海道稚内養護学校

- 報告者 吉田順省
- 報告期日 平成29年12月8日
- 実施校 北海道稚内養護学校
- 巡回指導者 吉田順省、市場大資、笠間慎也
- 当該校担当教諭 平川亮一教諭

○実施日 平成 29 年 12 月 6 日（水）

○実施日程 13：30～15：00 総合学習の時間（高等部 13 名、中学部 8 名）

○実施概要

今回の巡回指導は高等部、中学部の生徒さん合同で総合学習の時間でのフットサル授業となりました。また、近隣の稚内大谷高等学校との交流会ということもありましたが、実施日が悪天候の為、参加出来ない状態でした。

実施内容や進行は平川教諭と先生の皆さんが考え、行って頂き、私たちが各セッションに参加し一緒にフットサルを行うという流れでした。今日まで学校としてもフットサルを継続して取り組んでおられ、ゲートボール競争やキックターゲットなど楽しいゲーム制の多い内容で、生徒さんがわかりやすく、取り組みやすいものとなっており、車椅子の生徒さんでも参加出来るように車椅子に先生の皆様が作成した補助板や補助台なども使用して全員が楽しくフットサル出来るよう工夫していました。また、先生の皆様も生徒が楽しめるような明るい雰囲気作り、一人ひとりへのサポートの仕方など巡回させて頂いた私たちの方が勉強になることが多く、たくさんのことを学ばせて頂きました。最後の試合も先生、生徒の皆様と楽しく行わせて頂き、有意義な時間を過ごすことが出来ました。

今回の巡回授業でも「仲間と仲良く、楽しく」フットサルを行い「心と体の健康」を維持できるようにこれからもフットサルをはじめ、何かの運動やスポーツに取り組んで頂けたらと思います。



○自己評価及び今後の課題等

今回の巡回指導では、私たちが指導するというよりも逆に学ばせて頂いたことが多い巡回となりました。継続してフットサルに取り組んで頂いており、先生の皆様、生徒の皆様も楽しんでボールを触る姿を見ていると自然と私たちも一緒に楽しくフットサルを行うことが出来ました。フットサルが障がいのあるない関係なく楽しんで取り組めるスポーツであるということが再認識させて頂いた時間でもあり、今後もそのことを大切にしていかなければいけないと感じました。

また、今回も仲間とスポーツを行う「楽しさ」を大切にこれからもフットサルに取り組んで欲しいとお話させて頂きました。たくさんの先生の皆様、生徒の皆様と楽しんでフットサルさせて頂き、大きなケガもなく無事に終えることが出来ました。

今年度のフットサル巡回指導は全て終了しました。訪問させて頂いた学校の先生の皆様、生徒の皆様と楽しくフットサルさせて頂き、私たちとしりましても初めての活動で至らない点も多くあり、ご迷惑をおかけした面があるかと思いますが、ご支援、ご協力頂いた皆様のおかげで大きなケガもなく無事終了出来たと強く感じております。今活動で得たことを今後のフットサル活動に生かし、関わる皆様に有意義で楽しい時間を過ごして頂けるよう精進してまいりますので、今後も「小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会」をよろしくお願い致します。



2017 第 1 回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会報告

大会主管 一般社団法人 エスポラーダ北海道スポーツクラブ

GM 兼監督 小野寺 隆 彦

1 概要

第 1 回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会は、平成 29 年 7 月 28 日(金)、北海道青少年会館で開催しました。第 1 回大会は、単置高等部校を対象に、北海道特別支援学校 16 校(札幌あいの里高等支援学校及び小樽高等支援学校は特別参加)と韓国の特別支援学校 2 校、計 18 校、138 名の生徒が参加しました。

本法人は、札幌市から離れた学校には、都市間バスの往復分を助成し、かつ開会式開始に間に合わない学校の前泊宿泊と、閉会式後に各地にもどることができない学校には後泊宿泊を助成しました。特別参加の韓国安東市では TV ニュースでこの大会の様子が放送されました。大会は、北海道白樺高等養護学校が優勝、準優勝は北海道高等聾学校、第 3 位は市立札幌豊明高等支援学校と韓国安東栄明学校でした。

また優秀選手ベスト 5 は、若野翔太君(市立札幌豊明高等支援学校)、ヤン ドンウォン君(韓国済州特別自治道知的障がい蹴球団)、澤田偲怒君(北海道白樺高等養護学校)、ジョ ヒョンシン君(韓国安東永明学校)、中川 聖君(北海道高等聾学校)が選ばれ、フェアプレーに徹した選手を賞する小野寺眞悟賞は、山本 隼君(北海道函館五稜郭支援学校)と二川日菜さん(北海道中札内高等養護学校幕別校)に贈られました。

2 組織

- 大会長 小野寺 眞 悟(理事長)
- 副大会長 小野寺 裕 司(業務執行理事)
- 大会参与 堀 達 也、鎌 田 昌 市、堰 八 義 博、細 木 直 人(理事)、水野 克也(監事)
- 実行委員長 鈴木重男(事務局長)
- 総務委員会

受付・補助金等交付(各校の出欠チェック、パンフレット配布等)、大会写真・記録、駐車場

委員長 森田征男氏(札幌北の杜ライオンズクラブ) 委員 札幌北の杜ライオンズクラブ

- 競技委員会 大会日程作成、大会競技ルール、試合組合・抽選

委員長 吉田順省氏(社会福祉法人明日佳)、
副委員長 笠間慎也氏(社会福祉法人長沼陽風会)
委 員 宮越けんじ氏(北海道旭川高等支援学校)、笹本大輔氏(北海道白樺高等養護学校)
濱谷良介氏(北海道中札内高等養護学校)、鳴海潤一氏(北海道函館五稜郭支援学校)
金 熙洙氏(韓国安東永明学校)

- 審判委員会 審判業務

委員長 小野寺隆彦氏(エスポラーダ北海道 GM 兼監督) 委員 エスポラーダ北海道サテライト選手

- 宿泊委員会 前泊・後泊の受入・送出の計画・実施、宿泊選手等支援

委員長 櫻田なおみ氏(北海道拓北養護学校)、
副委員長 島田雄允氏(北海道岩見沢高等養護学校)
委 員 加藤由希奈氏、須藤育美氏、荻野志穂氏(北海道札幌養護学校)
佐々木大介氏、竹内太氏、中川敦志氏(北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校)

- 進行委員会 開会式・閉会式・競技進行、賞状筆耕、役員等謝金交付、救護関係

委員長 加藤多満美氏(北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校)
委 員 加藤由希奈氏(北海道札幌養護学校)、須藤 育美氏(北海道札幌養護学校)
救 護 米川 生美氏(社会福祉法人明日佳あすか House 手稲)

- 会場委員会 会場設定及び撤収

委員長 笹本大輔氏(北海道白樺高等養護学校)
委 員 東山崇麿氏、高橋由起氏、田村昌平氏、村井拓斗氏、鬼木宣尚氏、藤井悟氏、嘉野隆仁氏
石渡照彦氏(北海道白樺高等養護学校)

- プログラム委員会 プログラム印刷・製本 ※表紙デザイン 北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科学生

委員長 斎藤芳朗氏(北海道千歳高等支援学校)
委 員 古木憲吾氏、金津英尚氏、西川 満氏、保木本太地氏(北海道千歳高等支援学校)

Aブロック

	1 济州道	2 豊明	3 新篠津	4 紋別	勝点	得失点	順位
1 济州道		0●5	1●3	0△0	1	-7	4
2 豊明	500		0△0	600	7	+11	1
3 新篠津	301	0△0		201	7	+3	2
4 紋別	0△0	0●6	1●2		1	-7	3

Bブロック

	5 稲穂	6 白樺	7 幕別校	8 中標津	勝点	得失点	順位
5 稲穂		0●5	1△1	0●2	1	-7	4
6 白樺	500		402	400	9	+11	1
7 幕別校	1△1	2●4		0●1	1	-3	3
8 中標津	200	0●4	100		6	-1	2

Aブロック

学校名	略名
大韓民国济州特別自治道 知事公館(代表団)	济州道
市立札幌豊明高等学校	豊明
北海道新篠津高等学校	新篠津
北海道紋別高等学校	紋別

Bブロック

学校名	略名
北海道札幌稲穂高等学校	稲穂
北海道白樺高等学校	白樺
北海道中標津高等学校 幕別分校	幕別校
北海道中標津高等学校	中標津

Cブロック

	9 韓国永明	10 今金	11 新得	12 五稜郭	勝点	得失点	順位
9 韓国永明		2△2	401	201	7	+4	1
10 今金	2△2		501	1△1	5	+4	2
11 新得	1●4	1●5		0●4	0	-11	4
12 五稜郭	1●2	1△1	400		4	+3	3

Dブロック

	13 高豊	14 中札内	15 みなみの杜	16 札幌高養	勝点	得失点	順位
13 高豊		300	401	100	9	+7	1
14 中札内	0●3		0△0	0●1	1	-4	4
15 みなみの杜	1●4	0△0		100	4	-2	2
16 札幌高養	0●1	100	0●1		3	-1	3

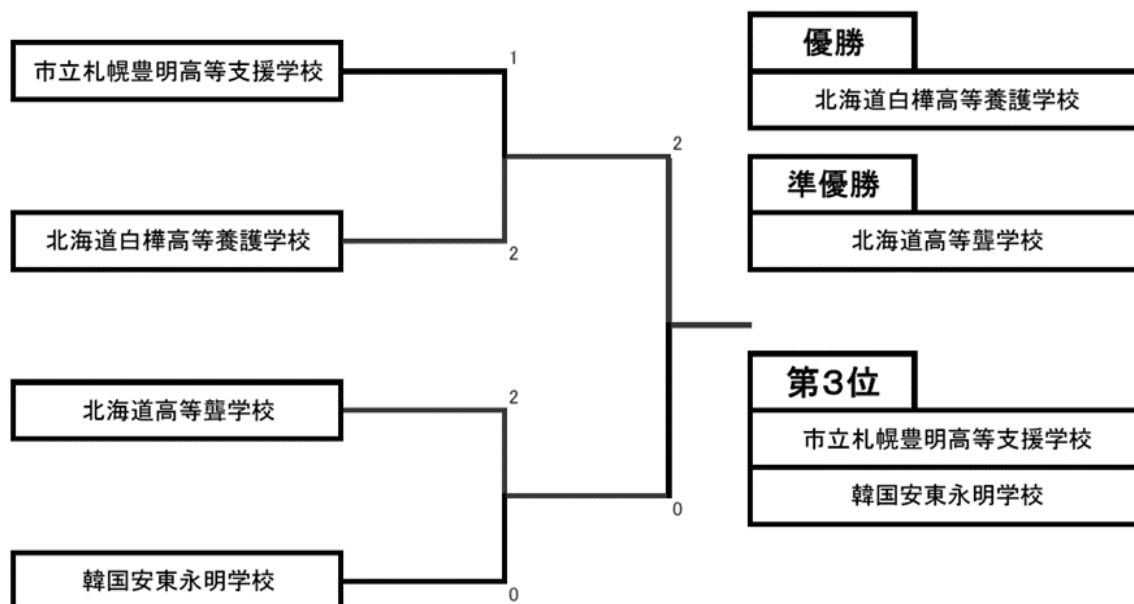
Cブロック

学校名	略名
韓国安重永明学校	韓国永明
北海道今金高等学校	今金
北海道新得高等学校	新得
北海道函館五稜郭支援学校	五稜郭

Dブロック

学校名	略名
北海道高等学校	高豊
北海道中札内高等学校	中札内
市立札幌みなみの杜高等学校	みなみの杜
北海道札幌高養高等学校	札幌高養

2017第1回 小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会 決勝トーナメント



2017第1回 小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会 交流戦

4位チーム 交流戦	大韓民国済州特別自治道 知的障がい蹴球団	0 — 0	北海道札幌稲穂高等支援学校
	北海道新得高等支援学校	1 — 0	北海道中札内高等養護学校
3位チーム 交流戦	北海道紋別高等養護学校	1 — 2	北海道中札内高等養護学校 幕別分校
	北海道函館五稜郭支援学校	1 — 1	北海道札幌高等養護学校
2位チーム 交流戦	北海道新篠津高等養護学校	1 — 0	北海道中標津高等養護学校
	北海道今金高等養護学校	4 — 0	市立札幌みなみの杜高等支援学校

2017第1回 小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会 個人賞

ベスト5

若野 翔太	市立札幌豊明高等支援学校
ヤン ドンウォン	大韓民国済州特別自治道 知的障がい蹴球団
澤田 惲怒	北海道白樺高等養護学校
ジョ ヒョンシン	韓国安東永明学校
中川 聖	北海道高等聾学校

小野寺眞悟賞

山本 隼	北海道函館五稜郭支援学校
二川 日菜	北海道中札内高等養護学校 幕別分校

2017年(平成29年)7月30日(日曜日)

北海道新聞

フットサル 果敢に攻め

道内特別支援学校 札幌で初の大会

道内の特別支援学校が競う初のフットサル大会が28日、札幌市内で開かれた。手軽なスポーツを通じ、協調性を育み、体力の向上を図るのが狙い。道内の16校と、親善のため韓国から駆けつけた2校が参加し、選手はボールを懸命に追い、果敢に攻めた。

生徒の卒業後の自立に役立てようと、札幌市の社会福祉法人「明日佳」や、フットサルリーグ「エスポラータ北海道」の運営団体の理事長を務める小野寺眞悟さん(77)が発案した。札幌市や函館市、十勝管内新得町など道内から約130人が出場。巧みなパスワ

クを見せ、強烈なシュートを決めるたびに、会場から歓声が上がった。

選手宣誓をした根室管内中標津町の中標津高等養護学校3年、菅原孝樹さん(17)は「周りの位置関係を見て、指示を出せるようになりたい」と話した。大会は、北広島市の白樺高等養護学校が優勝した。

(野呂有里)



特別支援学校のフットサル大会で、力強いシュートを放つ選手
(小松巧撮影)



●表紙デザインの趣旨

鳥獣人物戯画を参考にし、動物やキャラクターや人物がみんなで楽しくサッカーをしている様子を描きました。サッカーを応援している鬼や猿のキャラクターはパソコンで作成しました。

●表紙・裏表紙デザイン・ロゴマーク

北海道八雲養護学校 中学部 第3学年 尾崎翔平

●デザイン協力

北海道八雲養護学校 中学部

第1学年 松本慶太 第2学年 當田哲大 第3学年 菅原哉太